法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

キャリアデザイン研究における「人物研究」の意義と方法について ： 福沢諭吉にそくして

SASAGAWA, Koichi / 笹川, 孝一

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
93
(終了ページ / End Page)
141
(発行年 / Year)
2010-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007370

Hosei University Repository

キャリアデザイン研究における「人物研究」の意義と方法について

―福沢諭吉にそくして―

法政大学キャリアデザイン学部教授　笹川　孝一

1．はじめに

1）本稿を公表する理由

本稿は、私の担当する「キャリアデザイン学演習」で、“キャリアデザイン研究としての「人物研究」～人物のキャリアを研究することを通して自分のキャリアデザインを考える～”の導入部分として、自分自身の「人物研究」の経験(1)をふまえて、講義してきた内容を、整理し、文章化したものである。

これを、『キャリアデザイン学部紀要』という場で公表する理由は、次の通りである。

①　キャリアデザイン学部生、大学院生、卒業生たちのニーズに応える

まず、ゼミの学生や卒業生たち、あるいは大学院生がこの内容に強い関心を示してきたからである。しかし、講義ではメモていどの資料しか配付できない。そこで、学生にも配布される学部の刊行物において、整理した形で提示すれば、学生、院生、卒業生たちの理解や積極的な討論に資することができると、考えたからである。

②　学部改革のために一教員として授業内容を公開する

次に、現在進行中の学部改革の議論にも一定の意味をもつと考えるからである。キャリアデザイン学部では、2007年の第１次カリキュラム改革に続いて、2012年度から実施する第２次のカリキュラム改革の議論が進行している。そこでの論議には、多様な「キャリアデザイン研究」の集積から、どのようにしてキャリアデザインの「学」が成立しうるか否か？という論点が、底流にあると

Hosei University Repository

思われる。この点の議論を有効に展開するためには、一人ひとりの教員が自分の授業内容を公開することがきわめて重要だと考えられる。それを通じて自分自身の「キャリア」や「キャリアデザイン」の定義、「キャリアデザイン」に関する教育や研究の具体的内容を示すこと。その上で率直でオープンマインドな議論を行うこと、である。

私自身にはすでに、主に１年生対象の、いわば入り口での講義「生涯学習入門」について報告する機会があった。そこで、今回は、３～４年生が対象の、いわば出口部分の「キャリアデザイン学演習」および「卒業論文」指導における、ガイドラインとしての講義内容を公表する。

③　「キャリア」「キャリアデザイン」に関心のある人々との対話のために

３番目の理由は、このことが学部関係者以外の人々との対話にも何程か役に立つと考えたからである。そこには二つの人々を想定している。

一つは、「キャリア」や「キャリアデザイン」に関心のある人々である。昨年私には日本大学生活協同組合連合会（略称「大学生協連」）の「キャリア支援担当者」の研修会で講演する機会があった(2)。そこで分かったことは、ある種の「キャリアビジネス」が流す無責任な“キャリアの常識”に、大学生協連もかなり“毒されている”ことだった。それは例えば次のようなことである。

- 人との関係調整能力を含む広義のリテラシー能力(3)を育て、現実の選択肢を拡げる努力や指導がないままに、「キャリアとは自分らしく生きること」「なりたい自分になろう」という耳触りのいい宣伝文句だけが一人歩きしていること。
- その結果、「職業」がもつ「生業＋社会貢献＋自己実現」という要素の内、「自己実現」だけが肥大化して実力に見合わない職業選択を試みることが放任されていたり、ときには奨励されたりしていること。
- そして、「“なりたい自分”がわからないから就職活動ができない」現象も起きていること。
- 近代社会において「個人の自立」が奨励されてきたのは、「よりよい相互依存・相互扶助の共同体を作るための自立と、よりよい自立のための相互依存・相互扶助の共同体作り」との両立が大前提であったにもかかわらず、「個人の自立」のみが強調されて「共同体作り」が欠落していること。

Hosei University Repository

・そのために、学校や企業あるいは広く社会全般で、「自立」が一種の強迫観念として作用したり、「キャリアデザイン」論において、組織そのものへの働きかけが一定の範囲に限定されたり、既存組織への適応に集中する傾向が生まれ、不適応症に有効に対処しきれない現象も見られること。

こうしたことは大学生協連だけのことではない。最近、リベラルなことで有名なある高校の校長先生が、次のような趣旨のことを筆者に述べた。「『基礎学力』と伸び伸びと自分の行いたいことを追求することの折り合いをどうつけるか、いろいろと迷い、悩みながらも、『キャリアとは自分らしく生きること』『なりたい自分になろう』というようなことを言ってしまうこともある。だから、その点をきちんと組み立てて論文や本で書いてくれたら嬉しい。」

また2007年に、大手教育生活産業の高校生向け「キャリアデザイン」教材を作成している人が、私に教材のドラフトについての批評を求めたことがあった。そしてそれを見たところ、やはり同様の耳触りのよい“宣伝文句”、“甘いささやき”が並んでいた。さらに2005年、東北のある進学校での教員研修の折に、「よりよい自立のための相互依存システム・共同体作りと、よりよい相互依存システム・共同体作りは一対のもの」と述べた。すると、校長先生が次のように言った。「“キャリアデザインは生徒の自立を促すもの”とあちこちで聞いてきたので、今まで『自立』『自立』と生徒たちに強調してきたが、生徒たちには押しつけられたような反応もあって、何となくモヤモヤしていました。今日は“『自立』と『相互依存』とがともに支え合うのがキャリアデザイン”と聞いて、救われた思いです。」

そして、企業関係のメンタルヘルスを行っているある人は次のような趣旨のことを筆者に語った。「学校時代に成績がよく、“挫折”ということを経験せずに有名大学やその大学院を卒業して企業に入った人ほど、『うまくいかない』自分を受け入れにくい傾向がある。学校でも企業でも“成績”というものに縛られて、職場以外の所に価値を見いだしにくい傾向もある。そういう人は『どうにかしよう』と思えば思うほど、逃げ場がなくなり自分の現実を受け入れられなくなる。そして最後は、どうしても職場に足が向かなくなってしまう。だから、職場復帰のためには、世の中には学校や職場の成績以外にも多様な価値があることや、実際の自分を受け入れることを、自分や自分につながる人のこ

Hosei University Repository

とを振り返ったり、他の人の話にも耳を傾けたりしながら、分かってもらうことがとても大事です。」

管見の限りでは、このようなある種の戸惑いや混乱が中学・高校から大学にいたる学校でも、社会人を対象とする転職ビジネスや職場メンタルヘルスでも、相当広がっているように観察される。

「キャリア」「キャリアデザイン」という言葉やイメージには人を引きつけるものがある。しかし、「キャリア」や「キャリアデザイン」をめぐっては、様々な疑問が渦巻いている。「キャリア」の範囲はどんなものなのか。「ライフ・ワークバランス」「ライフ・ワーク・スタディバランス」というが相互関係はどんなものか？「ライフ」とは、家族のことか、趣味のことか、地域活動のことか？「市民」として「国民」として、あるいは地球人として地球のエコシステムを大事にする地球人としての「仕事」は「ワーク」なのか「ライフ」なのか？そもそも「仕事」とは「職業」のことか？「家事」は仕事ではないのか？「職業観」と「勤労観」とでは何が違うのか？「勤労」と「仕事」は同じなのか？違うとすれば何が違うのか？「専業主婦」「専業主夫」にはキャリアはないのか？「職業」とは「自己実現」のためのものなのか？生きるための「生業」として就職したり、職場で働いたりすることは「キャリアデザイン」の視点からは評価されない“邪道”なのか？「キャリアデザイン」では「人間力」「社会人基礎力」「○○力」が大事、コンピテンス、コンピテンシーが大事と言われるが、それと「学力」や個別能力＝アビリティーの習得やキャパシティーの修得との関係はどんなものか？「自己実現」や人生の節目を越えるときに参考にすべきだと言われる、“キャリアモデル”なるものを、どのように選びどのように参考にすればよいのか？

この他にも様々な点で、多く人々が戸惑い、答えや答えの探求方法を知りたい、ともに考えたいと願っているように見える。そこで、この分野で幾らかの社会的影響をもってきたと思われる法政大学キャリアデザイン学部設立に深く関わったものの一人として、自分自身の教育実践現場の一端を公開し、ともに考えることを呼びかけたい。

Hosei University Repository

④　福澤諭吉や近代日本・アジアでのキャリア形成に関心をもつ人々との対話のために

もう一つの想定は、福澤諭吉や近代日本、近代アジアにおけるキャリア形成の歴史に関心をもつ人々である。アメリカの独立戦争や独立宣言に深くかかわり、実業家、科学者、大学や公共図書館創設者で、100ドル札に肖像が載っているベンジャミン・フランクリンを、マックス・ヴェーバーは“資本主義の精神”の、「エートス」の体現者と呼んでいる(4)。そして、このフランクリンの『フランクリン自伝』(5)と福沢の『福翁自伝』(6)の共通点は、これまでも多く指摘されてきた(7)。仮に福沢を“東アジアにおける資本主義の精神”の体現者の一人だとすると、福沢のキャリア形成をどのように分析するかは、大変興味深いテーマだといえる。この点についてはすでに、『学問のすすめ』成立過程まで、中津時代の生活・学問修業との関わりに焦点を当てて、詳細なあとづけをした(8)。そこで、本稿では深くは立ち入らない。しかし、福沢はどこまで“人物のキャリアデザイン研究”のモデルになりうるかという、私にとっては新しい視点から、本稿ではいくらかの叙述を試みた。健全な意味での“資本主義の精神”の体現者として、大清国～中華民国時代の大陸や、朝鮮国～大韓民国時代の朝鮮半島では、どのような人を挙げることができるのか。私には俄には思い浮かばないが、康有為や孫文、「朝鮮の福澤諭吉」とも呼ばれているユ・キルチュンや金玉均などは、福沢の影響も受けた人物として検討対象になるかも知れない。また日本では、渋沢栄一、岩崎弥太郎などの人たちを加えることは意味があるだろう。そうしたことが進んでいけば、東アジア、アジア一円での共同研究も可能となり、「東アジア共同体」や「東アジア学習権共同体」さらには「東アジアキャリアデザイン共同体」についても、資することがあると、と考えられる。

2）本稿の内容

本稿の内容の概略は次の通りである。

①　社会のニーズに応える「キャリア」概念の拡張と構造化の試み

まず、2の1）では、「キャリアデザイン」研究が現代において必要とされる理由についての私の認識をのべた。「『キャリアデザイン』が人の心をとらえ

Hosei University Repository

る理由」について、6点に整理した。ⅰ）個人の複合的なキャリア、ii）葛藤を伴って人生の節目を選択していくこと、iii）世代から世代へと生命や技や智慧を引き継いでいくこと、iv）多様な共同体・組織のキャリア形成に積極的に関与すること、v）国民国家や世界国家、地域国家のキャリアへの積極的関わり、vi）地球と人間との関わりのキャリアへの積極的関与、である。

ここでは、①個人や世代という人に焦点を当てたキャリアとともに、②共同体・組織のキャリア、国民国家、世界国家、地域国家というシステムのキャリアと、③これに積極的に関与することを人のキャリアとして組み入れること、それらを包括するものとした、④人と地球との関わりについてのキャリアを設定した。

この試みには、「キャリア」概念の不当な拡張だという異論も想定される。しかし、リーマンショック以後、②のシステムのキャリアを設定せずに個人の次元だけでキャリアを論ずることが限界に来ていることは、誰もが認めるところだろう。その際に、国家を別立てしているのは、企業間競争が激しいとき、場合によっては、一企業による改善は不可能で、国家が規制する以外にはないというケースも多くあるからである。例えば、工場排水等の環境基準。最近では、オバマ米大統領が議会に提出しサルコジ仏大統領も積極的に支持している、企業におけるボーナス等給与の上限規制などもそうである。もしそうだとすれば、③システム・共同体の改革を自ら担う「改革者」としてのキャリア形成が欠かせないことは、論理的必然である。それにそもそも、福沢にせよフランクリンにせよ、近代社会における“典型的なキャリア形成”においては、“個人の発達と共同体の発展とは表裏一体のもの”として意識されていた。それは、アメリカ独立宣言やフランスの人権宣言においてだけでなく、福沢が「修身斉家治国平天下」という伝統的な『大学』のフレーズを「一身独立して一国独立す」と『学問のすすめ』[9]で言い換えたように、東アジアの伝統でもあった。

この、組織・共同体・国家のキャリアと、組織・共同体・国家に積極的に関与する人のキャリアを、「キャリア」論に組み込むことによって、組織と人間、共同体と人間との関係性のキャリアの研究テーマは、多様に開かれてくる。

④の「地球と人間との関わりのキャリア」とそれへの積極的関与を入れたの

Hosei University Repository

も同様の理由による。地球へのこれ以上の負荷は人間の生存の大前提を堀り崩すこと、そして生産、消費の両面から企業経営や個人生活のありようを変える必要性が、人々の共通認識となっているからである。また、これを入れることによって、人間という地球上の生物の生存様式・生活様式が、人間と自然との関わりの接点に介在する「技術」も含めて具体的に視野に入ってくる。そして、身体的精神的な生活の安定や、家族やコミュニティーの再構築、企業における新たなビジネスチャンス、商品化の効用と限界、市場経済と被市場経済との効果的組み合わせ等への人々の積極的関与という、キャリア研究の広大な分野が開けてくる(10)。

以上をふまえて、２の２）で「キャリア」の再定義を試みた。その際に、「学習」「教育」という行為の介在と「キャリア」形成を意識的に行う「キャリアデザイン」との関係に論及した。またこれを受けて、客観的事実としての「キャリアデザイン」研究の意義をのべた。

次いで、２の３）で「キャリアデザイン研究」の一環としての「人物研究」の意義について、それが「キャリアデザインにかかわる社会システム研究」とならんで、「キャリアデザイン研究の総論的位置」を占めることを述べた。そのうえで、「人生の旅・めぐりあいの追体験」としての「人物研究」の意味とその視角、それを行うことによって得られる効果について述べた。

②　マニュアルを提示し、マニュアルを越えることを促す

３では、福沢に即しながら「『人物研究』の方法」について述べた。

まず、３の１）で、「人物研究」を時系列的に考えた場合の「焦点」について述べた。

次いで、３の２）では、具体的な方法として、①研究対象の選定、②「人物研究」の具体的手順について述べた。ⅰ）先行研究を探す、ⅱ）資料を集め、読むこととフィールドワーク、ⅲ）文献等資料目録を作る、ⅳ）ノートを取る、ⅴ）年表を作る、ⅵ）執筆するなど、かなり詳細に述べた。

これについては、「大学生なのだから自主性に任せた方がいい」「マニュアルの提示は創造性を失わせる」「細かすぎる」「そこまでやる必要はない」という批判も想定される。たしかに私自身も指導教員からマニュアルの提示を受けたことはなく、自分自身で自分の研究方法を編み出したように思っているところ

Hosei University Repository

がある。しかしよく振り返ってみれば、私自身は東京都立大学という専任教員と学生の比率が１：２という、その意味では極めて恵まれた勉学環境で育った。ほとんど毎日のように誰彼となく教員とお茶を飲み、将棋を指し、囲碁を打ち、雑談したり、教員の論文や著書や自分の研究の進捗などについて、質問、議論したりして、学問の方法を吸収していた。学部２学生の頃から他大学であった「クループスカヤ読書会」や教育科学研究会など、大学教員や院生、現場教員などの研究会に出たり、福武直『農村調査法』（東大新書）などを読んだりもしていた。そして修士１年生のときには山住正己を中心に「教育科学論争」検討会を行い、学会発表から雑誌論文執筆までを行った。

このように私自身は、マニュアルの提示こそなかったものの、学部学生時代から研究方法について、一定の訓練を受けていた。このことを振り返ると、専任教員と学生の比率が、３～４年生だけでも平均１：23という法政大学の現実をふまえた場合、マニュアル提示の必要性は一概に否定できないだろう。剣道の世界では「守」＝師匠の教えを守り型に精通すること、「破」＝師匠の技をきわめた後に他の流派をも研究すること、「離」＝精進の結果自分の独自の方法を編み出すことが、創造的方法に達する道とされている。また一般に、「やってみせる→一緒にやりながら指導する→１人でやらせながら指導する→一緒に工夫し、自立させる」ことが、人を育てる基本とされている。その意味では、未熟ながらマニュアルを示すことも、学生の自立支援のために必要なことの一つと考えられる。

２．「キャリアデザイン研究」における「人物研究」の意義

１）「キャリアデザイン」が人々の心をとらえる理由

現代社会で「キャリアデザイン」が人々の心をとらえていることはたしかだ、と見てよいだろう。理由は、自分自身の“人生を「自分らしく」全うしたい”と考える人が多いからである。そしてそこには、いくつかの要素がある。

①　人々と積極的に関わり、多面的に人生を楽しみたい＝人生の多面的なキャリアへの欲求

先ず、職業も、恋愛や結婚も、親戚づきあいや友達づきあいも、近所づきあいも、勉学や趣味や遊びも“全部楽しみたい”、“多面的”あるいは“全面的

Hosei University Repository

に”人生を楽しみたい、自分の能力を活かしたい、育てたい、という“贅沢な”欲求がある。人生の多面的なキャリアへの欲求である。

②　人生のそれぞれの時期を味わいたい＝適応し選びながら人生を全うするキャリアへの欲求

ⅰ）それぞれの時期を味わう

また、せっかく生まれてきたのだから、一度しかない“人生のそれぞれの時期を十分味わいたい”という欲求もある。赤ん坊の時期は赤ん坊でなければできない体験を、幼児期には幼児期にしかできない体験を、少年少女期、思春期、青年期、年少成人期、壮年期あるいは熟年期、高齢期、終末期のそれぞれの時期を十分に味わって人生を終えたい、という欲求である。これが“人生の問題”として意識化されるのは思春期以後のことである。しかし、この欲求充足の行為は、それ以前の時期から行われている。それは、DNA に組み込まれた情報と周囲の環境とが組み合わさって、赤ん坊あるいはそれ以前の胎児期から、一個の生命体としての自分自身の可能性の展開のために行われる行為である。子宮の中で運動すること。渾身の力で産道を通って“娑婆”に出てくること。誰にも教えられなくとも母乳を吸って空腹を満たすこと。泣くことで欲求を他者に伝えること、など、当面の必要を充たす行為の連続性として、それは表現されている。

ⅱ）葛藤し闘い、適応し、選択し、変化し、環境を変え、協力して、人生の節目を越えながら生きる

そして、生物体として生殖準備をする思春期の葛藤と、近代社会における人生選択を迫られ始める青年期以後の葛藤と共に、“人生”が意識される。

この時期と共に、近代社会で生きる人々は、意識化された人生の struggle に踏み出すことになる。人生の各時期、各ステージが連続性とともに断絶をも、もつこと。自分という存在は、生まれ育った自然や社会、家庭などの環境に規定されていること。しかし、何ほどかは自分自身の努力で人生の可能性を拓きうること。“自然や社会の環境に適応しなければならない人生”。しかし、どんな人生を選ぶかの決定は、法的には個人にあるから、文化的社会的経済的な条件次第では、“選択可能な人生”。“適応しながら選択すべき人生”。“適応しながら、環境も変え、自分自身も変わり、自分の人生も選び取る”人生等の、

Hosei University Repository

実践的、心理的な“struggle＝たたかい・葛藤”を、死ぬまで、あるいは全面的に“痴呆”になるまで、行いながら生きてゆくことになる。

③　世代から世代へ生命や技や智慧、作品を引き継ぎたい＝生命と智慧、技と作品を引き継ぎ発展させるキャリアへの欲求

こうした個人の葛藤やたたかいを支えるものは、親や祖父母、おじさんおばさん、兄や姉、先生や先輩たちなど、自分より先に生きた人々から学ぶ、ということである。その学びの基本は何よりも、その人たちが日々生き、働き、楽しみ、悩み葛藤し、たたかう実際の姿から学ぶことである。その人たちと一緒に、時間や空間を共有し、同じものを食べ、共に働き、楽しみ、悩み、ケンカや和解もふくめて、葛藤し協力したたかうことを通じて学ぶ。また、“追体験”という方法でも学ぶ。先人たちの話を聞いたり、日記を読んだりして追体験する。あるいは、先人たちが遺した建築物や仕事や生活の道具、農業や漁業、工業、絵画や彫刻、音楽などの芸術作品や書物、スポーツの記録など、さまざまな“媒体”に接することを通して、その人の生きていた時代、地域、家庭をイメージし、その人の一生をあとづけながら学ぶ。

そして、これら先人から贈られ、学んだ技術や知恵、作品を受け継ぎながら、自分や自分たちの地域や時代の自然や社会や家族の環境の中で“解決したい”“実現したい”と感じた“問題”や“課題”を解こうと努力する。それらの課題はときに実現し、それに伴って技術や知恵を磨き、新しい作品を創り出す。またときに実現できず、その不成功の状況や理由などを考える。そしてこのいずれをも、同時代の多くの人と共有する。

その上で、自分の子どもや孫、弟子たちや職場や地域、同好会の後輩たちに、直接的・間接的な方法で、技術や智慧を伝授し、これらの人々を育てていく。

④　自分が生まれ、働き、育ち、生きてきた共同体・組織をよりよくし、共同体を創り出したい＝組織・共同体のキャリア形成に積極的に関与するキャリアという欲求

人がそこに生まれ育ち、働き遊び生きていく場所は、真空状態ではない。具体的な時代と場所の、具体的な共同体あるいは組織である。

先ず胎児として育つ場所は、母の子宮であるが、その母は何らかの意味での

Hosei University Repository

家族の中に暮らし、職場で働き、近所づきあい、親戚づきあい、友達づきあいをし、現代社会の自然的・文化的環境の中で生きている。

生まれる場所は、近年では病院という組織の中であり、家族の中で育ち、親戚や近所の子どもたちの中で遊び、保育園、幼稚園、小学校以後の学校で遊び、学ぶ。同時に、“お稽古事”やスポーツ教室等でも学ぶ。高校、専門学校や大学へと進学し、ときに留学する。アルバイトをし、企業社会で働いたり、家業を継いだりして、生業であり社会貢献でもあり、結果として自己実現でもある、「職業」に就く。経済のマネーゲーム化や非正規雇用の拡大の中では、ときに失業し、再就職のための職業訓練を受けることもある。家族も安泰とは限らず、離婚や死別、介護などの困難に直面することもある。

このように、複数の共同体・組織の中に生まれ、育ち、働く現代人は、それらの共同体・組織に適応し、その構成員として自分を育てながら生きている。

しかしこの共同体自体が揺れ動き、変化のなかで葛藤しながら存在している状態にあるので、共同体をよく知りたい、共同体に対してポジティブに関わりたい、ときには組織や“コミュニティー”を新たに立ち上げ経営したい、という願望を持っている。それはときに実現されるが、ときには関わり方が分からず悶々とすることもあり、これ自体が１つの struggle である。

⑤　自分が属する「国民国家」や世界国家、地域国家をよくしたい＝国家や世界国家、地域国家のキャリア形成に関与したいというキャリアについての欲求

人間は、数千年の時間をかけて「国家」を創り出し、発展させてきた。誰もが「国籍」をもち、規程に従って税金などの「役務」を国家に提供し、安全で健康な生活のための“法による保護”を受け取る権利を「国民」はもつ、こととなっている。20世紀には世界的な大戦争が起こり、経済的な相互依存関係、人やモノの活発な往来も進み、世界中を巻き込んだ世界恐慌やマネーゲームのように、人々の暮らしは「国民国家」との契約だけでは完結しなくなった。そこで、国家と国家との契約という形式で、United　Nations＝連合国家＝“国連”などの世界国家 UNESCO、UNICEF などの付属機関、International Labor Organization＝ILO や赤十字などの世界組織を、人々は作ってきた。さらに European　Union＝EU や Association　of　South　East　Asian　Nations＝

Hosei University Repository

ASEAN、Organization of American＝OAN などの地域国家創造も着手され、日本や中国、韓国等も含む East Asian Community＝東アジア共同体にかんする構想や議論も、かつての「大東亜共栄圏」という、一種の地域国家の反省をふまえつつ、活発になっている。

日本について言えば、巨大な国内における財政赤字、年金や雇用、医療や“景気”“成長戦略など、政府の内政への関心が高まり、積極的な投票行動が目立っている。また、沖縄の米軍基地や“対等な日米関係”、“日本の独立”旧琉球王朝の流れを汲む沖縄県民の意思の尊重、台湾海峡問題を含む大陸中国との調整、韓国や台湾との協力などの国際関係も重要な課題となっている。

このように、国家もまたその軌跡＝キャリアをもっている。そして、2009年のアメリカでのオバマ政権誕生と、日本での自民党から鳩山連立政権への政権交代など、「国家」やナショナリズム、インターナショナリズムや地域共同主権に対する人々の関心や積極的関与の欲求も大きなものとなっている。

⑥　他の生物と共生できる地球と人間とのよいつき合い方を工夫したい＝地球と人との関わりのキャリアに関与したいというキャリアへの欲求

今日、人間の生存場所としての地球への人間の関わり方が大きな関心を集めている。人間と水と陸地の接点であり生命のゆりかごでもある「湿地」の保全・再生や賢い利用（ワイズユース）を推進しているラムサール条約。地球温暖化防止のための CO_2排出規制などの気候変動枠組条約。2010年11月に日本の名古屋で開かれる生物多様性条約第10回締約国会議（Conference of Parties10＝COP10）などの国際条約への関心も強まっている。そして、“エコカー”“エコ減税”“エコ・ルネッサンス”など、日常生活から産業のあり方、社会システムにいたるまで“エコ”な生活、エコシステム＝生態系の維持・回復に関心が集まっている。ショッピングバッグや太陽光発電、電気製品の“つけっぱなし”を減らす運動、など一人ひとりができる行動を心がける人も増えている。

そのなかで、近代化以前の循環型産業やライフスタイル、“循環型都市・江戸”の再評価もふくめ、地球と人との関わりを振り返り、人と地球とのよりよい関係を作ることに自分も貢献したいという欲求が高まっている。これは、“地球と人間との関わりのキャリア”への積極的参画というキャリアへの欲求だと言える。

Hosei University Repository

2）「キャリア」再定義の必要性と試み

①　「キャリア」再定義の必要性

現代において、人々が「キャリアデザイン」という言葉に惹かれる理由として、以上のべたような要素があるとするならば、「キャリア」の定義もこれに適合するように、再検討する必要がある。

一般に「キャリア＝career」は、

①　競馬場の軌道が原義であり、そこから、

②　人の歩いた軌跡、人生、という意味と

③　速く走る、出世するという２つの意味とが派生し、

④　さらに、③から出世と考えられる職業という意味が派生し、

⑤　その上で、④から「出世組」「職業経歴」「職業」という意味が派生した、とされる。

そこには、キャリアは職業や職業経歴をも含みながら、全体にわたる時間的な継続性と内容的な複合性が示唆されている。私見によれば、これまでよく議論の遡上に上がってきた、いわばメジャーの「キャリア」の定義として、これを最もよく反映しているのは、スーパーの「キャリアレインボー」である。そこでの「キャリア」は、子としての役割、市民、職業人、親などの役割の複合として、またそれらが年齢とも関連する社会的なライフステージの変化に伴って変わるもの、とされている。また、ライフステージとキャリアとの関連で無視できないのはエリクソンである。エリクソンは、人生の各時期の移行にはそれまでの体験とを引き継ぐという連続性と新たな道の体験という不連続性とがあり、両者の葛藤を通して自己のアイデンティティが保たれるとしている。そして、この連続不連続について、職業的に関連する転換、環境変化に焦点を当てたのがシャインと考えられる。新たな職業環境やミッションへの適応という不連続性を伴う側面を「キャリアサバイバル」、職業以外の要素も背景にもつそれまでの連続性の側面を「キャリアアンカー」と呼んだと考えられる。

以上の点と、私が述べたａ）～ｆ）を対照すると、まずａ）の多面的なキャリアｂ）適切な選択によって人生の各時期を全うするキャリアは、その内容上の異同等を別にすれば、これまでの「キャリア」論で位置づけられているといえる。ｂ）に関する連続、不連続や飛躍の問題も、エリクソン、シャインの議

Hosei University Repository

論をはじめ、多くの人によって論じられてきた。ｃ）の世代を超えた生命と智慧や技のリレーは、スーパーの子としての役割、親としての役割という点で意識はされているが、必ずしも十分な展開が成されているとは言えない。ｄ）の組織・共同体のキャリアへの積極的関与のキャリア、ｅ）国家、世界国家、地域国家への積極的関与のキャリア、ｆ）地球と人間の関わりへの積極的関与のキャリアについても、スーパーの“市民としての役割”で、一般的には視野に入っているとも見られる。しかし管見の限りでは、日本でのこれまでの「キャリア論」においては、まだ重要な論点として浮かび上がっていないように見える。誤解を恐れずに言えば、これまでの日本におけるメジャーな「キャリア」論には環境への適応あるいは「うまく生きていくこと」を重視する傾向がつよいのではないか。そして論者の意図はともかく、結果的には、現代社会でより優位な立場に立つ者の視点が軸となり、弱者には過酷な「キャリア論」になっているのではないだろうか。それは短期的には、優位な立場にある企業の経営にとっては好都合で利潤をもたらすように見える。しかしマクロの経済循環がうまくいかなくなる。したがって、一部の投機筋にはよい場合があっても、社会に必要とされる製造、流通、サービスなどによって成り立つ企業にとっては、中長期的にはよい結果をもたらさない、と考えられる。

そのために、レーガン・サッチャー・中曽根ラインが主導したいわゆる“新自由主義”の結果生まれた富の偏在、非正規雇用の拡大、とくにアメリカのマネーゲーム・サブプライムローンを直接的な引き金とする2009年の“リーマンショック”を前後して、「キャリア」論に変化が生まれている。

“Change！”“Yes, we can！”を標榜したアメリカのオバマ政権、“友愛”“いのちを大切にする社会”“コンクリートのための政治から人のための政治へ”を標榜する日本の鳩山政権が米日で相次いで誕生した。そこへつながる動きとも連動しながらも１つのきっかけとなって、少なくとも日本では、既存の社会システムへの適応主義的キャリア論への反省もしくは批判が表面化した。雨宮処凛、湯浅誠、本田由紀、佐貫浩らによる適応主義的「キャリアデザイン」論への批判。加えて、地球温暖化への警告や生物多様性への関心等も背景に、“共同体や組織、国家のあり方、地球と人とのつき合い方へ積極的関与のキャリア“への関心。これらが、徐々に人々の心をとらえつつある、と見られる。

Hosei University Repository

③　「キャリア」再定義の試み

そうであるとすれば、それぞれの論者に、「キャリア」の再定義の提案が求められている、と言える。そして、以下のような私の再定義の試みも、議論の参考として、一定の有効性をもつと考えられる。

「キャリアとは、一般的に人が生命体として存在して以後、誕生から死までの間に、他の人々や他の動植物を含む自然、人間が作りだした道具や機械、色彩や形、文字や記号等で表現された様々な作品、多様な社会的システムに接することによって蓄積される、連続的あるいは不連続的な行為の積み重ねを指す。それは、自分の存在と自分に関わりのある人々、自然や作品や社会的システムに関して、身体的な反応や精神的な認識を高め拡げ深める、学習やその指導としての教育、自分の能力の発揮や修得を伴いながら進行する。

その経験の構造に注目するとき、少なくとも、①家族や親類、友人とのキャリア、②様々な広がりのコミュニティーにおけるキャリア、③社会的な仕事の分担でもあり生きるための「生業」でもある職業的なキャリア、④遊びとしての様々な自己表現や学習活動のキャリアという、４つの領域が個人のキャリアにはある。

また、その時間的な側面に注目すると、キャリアは胎児期から、幼少期、少年少女期、思春期、青年期、成人期、高齢期、終末期などを経験する。この、身体的成長や衰退に関係するそれぞれの時期の移行には、こうした時期をもつ他の多くの動物と同様に、近代化以前の時期から、未知のステージへの生死をかけた飛躍・葛藤・闘争を伴っていた。そして、商品経済が広く生活に影響を与え契約が普及している近代社会で生きる者の場合には、一人ひとりの人間が自立した“個人”として、法的には自分の人生を自己決定する自由を持ちながら、経済や文化的条件に制約されて現実的には不自由であるという近代社の個人にとって避けられない矛盾に、思春期以降連続的に直面する。そのためにこと矛盾と葛藤し闘う struggle 過程としてのみ、人生の各時期の移行を実現することができる。

この過程は、一個人において孤立的に生ずるのではなく、先行世代から生物的な遺伝子や様々な技や智慧や課題を受け継ぎながら、自分たちの世代において取捨選択し必要なものを発展させあるいは新たに発見して、それを次の世代

Hosei University Repository

に伝えていく過程として、また、同世代の人々との間での切磋琢磨の過程を通じて実現される。

この過程はまた、具体的な時代の具体的な場、すなわち家族、地域コミュニティーや地方自治体、事業所などの共同体＝組織に規定されながら進行する。そこで、時代の課題をつかみとりながら、それらの共同体＝組織がより本来的な機能を果たしうるように積極的な改善・改革を働きかけ、「“組織と共同体のキャリア”の発展を促進するキャリア」という側面を伴うことになる。

この過程は同時に、近代化以後においては“国民国家”とナショナリズムに規定されながら進行してきた。そして、戦争や世界恐慌の惨禍に直面する中で、その限界を超えるために国連などの“世界国家”やヨーロッパ連合＝EU や東南アジア諸国連合＝ASEAN や東アジア共同体などの“地域国家”を創り出してきた。そこで、「“国家とナショナリズムのキャリア”過程に対して、不断に改善や創造について積極的関わるキャリア」という要素をも伴うこととなる。

さらに、地球の自然の恵みに依存しながら生きてきた人間が、近代化以後、地球に過度な負荷をかけて“開発”をすすめてきた結果、地球の生態系の維持が難しくなっている今日、人間が地球上の生態系の一部でありながら地球を持続的に活用していける過程に積極的に関わる「“地球と人間との関わりのキャリア”への関与というキャリア」をも視野に入れつつある。

そして、自然的・社会的・文化的な環境に規定されながら、時代や空間や組織・共同体などの課題と自分自身の課題を重ねて、学習や教育を伴いながら、可能な限りにおいて自分自身で創造的・個性的に、一生涯にわたり世代から世代へと引き継がれていく、複合的なキャリアをデザインし実現していくことを、キャリアデザインという。このキャリアデザインの過程を学習と教育に着目するとき、それは生涯学習、生涯教育の過程だといえる。」

③　「キャリアデザイン研究」の意義

このような「キャリア」を積み重ねることを、多くの人は望んでいると考えられる。しかし「キャリア」に関する多くの“常識”が、“キャリアデザイン”の名の下に、人々の願い萎縮させていることも、珍しくない。

その“常識”とは、「はじめに」でも述べたように、次のようなものである。

Hosei University Repository

「キャリアとは自分らしく生きること」「なりたい自分になろう」という、ある種のキャリアビジネスによる耳触りのよい謳い文句。それによって、若者たちも高校の進路指導教員も、他の人との共同や企画の力も含めて、実力、能力、リテラシーを磨かずに、願望がそのまま現実になるかのような幻想に踊らされ、結果的にはキャリア形成に失敗する。また、臨機応変な能力としてのcompetencyやプロジェクト遂行能力としてのcapacityを、「人間力」「社会人基礎力」としてその重要性を強調することは、妥当であり大切である。しかし、その基礎を形成する多面的な基礎能力としてのabilityやliteracyを軽視する風潮が一部に生まれているのも事実である。そして、結果的にはcompetencyやcapacityも形成されにくい現実があることも、否定できない。さらに、現実の「職業」は「生業＋社会貢献＋自己実現」であるにも関わらず、自己実現の側面だけを強調するキャリアビジネスの宣伝によって、「なりたい職業が見つからないから就職しない」という高校生や大学生が増えている、という現実もある。そして、「キャリア」を「職業」だけに限定して、職業キャリアを支える他のキャリアを視野の外に置くので、結果的に職業キャリアの展開が図れないこともある。組織＝共同体のキャリア、「国民国家」や世界国家、地域国家のキャリア、地球と人とのつき合い方のキャリアへの積極的関与という「キャリア」を除外する、適応主義的「キャリア」論の広がり。その結果、キャリアデザインを個人的な次元に押し込め、結果として、個人も企業などの組織、国家も本来の機能を果たせない、一種の“キャリアデザイン不全”に陥っている現実もある。

このような、「キャリア」についての“常識”による“キャリアデザイン不全症候群”が、無視できないほどに広がっている現実がある。そこで、①具体的な人物の一生に即した「キャリア」の展開と、②自分の意思が関与することによって起きる「キャリアデザイン」の実際とを研究すること、③それに伴うシステムや基礎概念を検討することが、“キャリアデザイン不全症候群”から人々を救い出すことに、貢献しうることが注目される。それは、①具体的ケーススタディの事例を増やす。②そこから経験則や仮説的な一般原則を引き出す。そして、③自分自身の指針としたり、実際の相談、指導の活動や業務に援用したりして、キャアデザインへの願いを、現実的条件に見合って実現するこ

Hosei University Repository

とをサポートする。

3）「キャリアデザイン研究」における「人物研究」意義

①　多様な「キャリアデザイン研究」の必要性と「キャリアデザイン学」の可能性

このような文脈で「キャリアデザイン研究」を行うときに、もちろんそのテーマ設定や方法は多様であることが望ましい。

企業内における職業キャリア形成が、企業にとっても被雇用者にとってもよい効果をもたらすような人事労務や教育研修のあり方。女性の職業キャリア形成と家族キャリアとの両立を促す、企業や国家の制度。非正規雇用者のキャリアが発展的に展開するための、社会的枠組み作りやその運用における労働組合や NPO の役割。幼少期の体験とコアキャリア形成に関する研究。ファミリーキャリアの形成における家族旅行や家族内行事の役割。基礎学力＝基礎的と応用学力、生きる力との関係、それとの関わりでの「学力」あるいは「学」「問」力の構造(11)。リテラシー能力の形成が臨機応変のコンピテンシーやプロジェクト遂行のキャパシティーへと発展していく上での、学校、家庭、地域社会との協力のあり方。学校における職場体験が通常授業との関係で内面化されるための指導のあり方。高校や大学におけるキャリア教育のプログラムについての実証的検討。とりわけ大学におけるキャリア教育と専門性との結びつき。地域社会におけるエスニックマイノリティー、移民・移民労働者の社会適応とホストカントリーや地法自治体、NPO の役割。地域におけるアートフェスティバルが市民としてのキャリア形成に果たす役割。生物多様性を視野に入れた地場産業復興を含む地域づくりに対する、住民参加が、自治体職員、農協、漁協、観光協会会員や NPO 会員などのキャリア形成に果たす役割。地域における人材育成にとってワークショップ型の研修・研究会が果たす役割等々。

このような主として実際例の即した現状分析について、その方法も多様であることが望ましい。文献調査によるもの。フィールドワークや聞き取りによる調査。参加型あるいは実験型の“参与観察”研究。数量的調査。既存の統計表を使う研究などである。

また扱う内容も、多様でなければならない。現状分析の他に、「キャリア」

Hosei University Repository

「キャリアデザイン」の概念など抽象度が高い研究。「キャリア研究」の歴史的変遷、国際比較等、時間的空間的視野を広げた研究も、もちろん必要である。さらに、将来予測とシナリオ提示もキャリアデザイン研究の一部を成しうる。そして、このような多様で膨大なキャリアデザイン研究が蓄積されることを通して、「キャリア」と「キャリアデザイン」に関する研究対象、基礎概念とその相互関係や定義に共通の理解が徐々に生まれ、そこに「学」としての「キャリアデザイン学」が成立していくと、予測される。

②　「キャリアデザイン研究」における「人物研究」の意味

このような多様な対象、テーマ、方法によるキャリアデザイン研究の中で、「人物研究」は一つの基礎的な位置を占める、と考えられる。

ⅰ）一人の人物のキャリアデザイン研究とキャリアに関わる社会システム研究〜キャリアデザイン研究の二つの極をなす総論的研究〜

「キャリア」も「キャリアデザイン」も、ある具体的な一人ひとりの人の一生において起こることである。前述の通り、人は、他の人々、自然の生物や無生物、人と人、人と自然とが関わり合うことによって産み出された作品や道具、技や智慧に接して、自分の DNA に組み込まれた情報をもとに能力を発揮し、経験し、学習し、訓練し、修得する。偶然的・意思的に決断・選択するという連続・不連続の中で、その一生における行為を積み重ねていく。この過程によって、個人の多面的なキャリアも、世代から世代への生命と技や智慧のリレーも、組織＝共同体のキャリア、国民国家や世界国家のキャリア、地球と人との関わりのキャリアに対しても積極的あるいは消極的に関与するキャリアを経験していく。この視点からいえば、一人ひとりの人物のキャリアというものを外してキャリアは存在しない。また、一人ひとりの人物のキャリア研究を外してキャリア研究は存在しない、といえる。

もちろん、「キャリアデザイナブルな社会」を作ることが「キャリアデザインにとって不可欠」だと、佐貫浩が早くから主張していたように、一人ひとりのキャリアが受動的に形成されるのではなく、能動的にデザインされうるようなキャリアに関する社会的なシステムの研究が、人物研究の対極にある。この意味では、キャリア形成がそこで行われる社会的システムを外しては、一人ひとりのキャリアは存在しえない。また、そのシステムの研究を外しては、キャ

Hosei University Repository

リアデザイン研究も存在しえない。

以上のことから、キャリアデザイン研究の全体において、一人の人物のキャリアデザイン研究とキャリアに関わる社会システム研究とは、少なくとも二つの極をなす、キャリアとキャリアデザイン研究における、総論的研究であるといえる。

ii）旅・巡り会いの追体験としての人物のキャリアデザイン研究

この二つの総論的キャリアデザイン研究の中で、一人の人物のキャリアデザイン研究＝“人物研究”は、一人の人間の“人生の旅”の中での、前述のａ）～ｆ）のキャリアと巡り会う体験についての、追体験のようなものである。

ある日突然、人は自分の意思とは無関係にある時代のある場所のある家族に生まれ、親や周囲の人々、土地や時代から、DNA 情報とともに、一定の生活様式の下での様々な経験、能力発揮や修得、成長のための試練を与えられる。時代や土地や家族の課題から、自分なりにミッションを受け取り、修業をし、一定の達成をし、次の壁の前で考え込んだり挫折したり、藻掻いたりする。それを乗り越えたり乗り越えられなかったりして、次のピークへ向かう者、下山をはじめる者も出る。次世代の生産や育成に取り組んだ者も取り組まなかった者も、人生の有限性について切迫感をもって感じる頃から、次の世代への生命や技や智慧のバトンタッチを真剣に考えはじめる。前の世代からのバトンタッチの様々な情景、自分なりに全力疾走した時期や疲れた時期を思い起こしつつ、次の世代に対して自分は何ができるのか、何を引き継げばよいのかを考え、その一部は実行し、一部は書き残し、一部は誰にも言わないまま胸にしまって“あの世”へと旅立っていく。

後から来た世代は、その人に興味を持った場合、その人生＝キャリアの事実をトレースし、“ああ、そうだったのか”“そういうわけだったのか”“がんばったね”“えらかったね”“苦しかったね”“バカだったね”“一所懸命生きたね”などと共感する。また“あなたのキャリアとキャリアデザインの struggle 引き継ぐからね”“忘れないからね”“自分のキャリアデザインの教訓にするからね”などと対話する。そして気がつくと、自分自身のキャリアデザインの事実を振り返って、これからのことを考えている。さらに、これに刺激されて、日記をつけたり自分史を書いたり、それらを友人たちに語ったりすることへとつ

Hosei University Repository

ながることもある。

iii）人物研究から得られるもの

a）他の人の人生への共感能力

このような「人物研究」から得られるものは、まず、自分とは異なるが自分が関心をもつ、他の人への共感である。研究をした人には、研究対象以外の人と接したときにも、その人の人生のキャリア、職業キャリア、ファミリーキャリア、シティズン・コミュニティーキャリア、学びと遊びのキャリアなどを、想像する、習慣がつく。そのことが、人を理解し、人との一致点・協力しうる点を探る習慣にもつながる。そして、様々な場所で人のサポートもでき、自分も楽しく人とつきあえるようになる。

b）人を時代と地域の中で再現し、その時代的、地域的その他の条件を分析し生かす能力

人物研究によって得られるものの第二は、その人の人生＝キャリアを一定の時代や場所、家族や組織の中で再現する能力がつくことである。人は誰も、特定の具体的な時代、土地、家族の中に生まれ、政治的、経済的、文化的、人間的関係的な条件の制約を受ける。そして、そこで得られたメリットを生かしながらデメリットを克服しようと、努力し藻掻き、あるときには成功し、あるときには失敗している。人物研究をすることによって、対象人物が生きた時代や地域についての具体的な情報、知識を得ることができる。そして、分析し、その人物に与えた影響、その人物が葛藤した課題を理解できる。それによって、自分が生きている時代や地域について分析し、理解する習慣や能力が身につく。また、自分自身についても他の人についても、その人がもっている社会的制約条件やそれを越えていく、その力となりうるメリットが何であるのかを、分析し、正確に判断しようとする習慣がつく。それによって、自分自身のキャリア形成にとっても、他の人のキャリア形成支援についても、その人がもっている条件を分析し、条件を生かす発想を身につけることができる。

c）人生の節目と越え方の予備訓練

第三は、修業・努力や柔軟性の大切さ、挫折からの立ち直りの粘り強さ、人生の節目とその越え方に気づくことである。誰も明日は未知のことである。だから、特定の人物にそくしてキャリアとキャリアデザインとを追体験すること

Hosei University Repository

によって、その人の人生の節目、転換点での挫折やその乗り越え方、修業時代の努力や、偶然性を生かせる柔軟さについて学ぶ。それによって、自分自身の節目の越え方に際して、あまり慌てずに対処することができ、それを他の人とも共有することができる。

d）社会的条件変更への積極的関与の大切さについての気づきと現場での工夫の習慣

第四は、社会的条件に対する積極的な関与へのキャリアの大切さに気づき、現場で様々な工夫ができる可能性が高まることである。人のキャリアデザインは、社会的に制約されながら自己の可能性を最大限追求するところに成立する。だから、社会的制約条件を緩和したり変更したりすることによって、個々の人がもっているキャリアデザインの可能性は拡大する。キャリアデザインを個人の枠の中だけに閉じ込めようとする風潮も、今日まだある中で、広い意味での“まっとうな市民社会”を、家庭、事業体、地域、国家、国際・地球社会の全てに渡って少しでも実現していくことは、個々人のキャリアデザインのよりよい実現に資することになる。人物研究はこの点への気づきも促進する。個人の条件や努力と社会的な条件の緩和や変更によってキャリアデザインの可能性を拡大すること。それを、あらゆる現場の些細な工夫によって実現していく視点や習慣を得ることができる。

e）研究調査・執筆表現等の技術・リテラシー、プロジェクト遂行と支え合いの能力を習得できる

最後に、後述の研究人物の設定や資料検索・収集、読み抜くこと、聞き取りを行うこと、文献・資料目録の作成、資料ノート、年表作成、論文の構想、構成、表現・執筆を行うことによって、課題設定、調査、データ整理・管理と活用、情報組み合わせによる知識の創造、構成力や表現力が鍛えられる。また、このプロセスをやり遂げることで、粘り強さが、ゼミや研究室などにおける研究集団の仲間との刺激のし合いによって、仕事や生活での励まし合い、支え合いの能力も身につく。

これは、人物研究に限らず、これは研究調査論文執筆に共通するものであるが、こうして身につけた能力が、卒業後の家族や恋愛や結婚・友人関係のキャリアにおいても、職場でのキャリアにおいても、地域活動や国際貢献や遊びや

Hosei University Repository

学びのキャリアにおいても、その礎となる。仮に、「大学での学問などは社会に出て役に立たなかった」という人がいたとすれば、その人は、技や智慧の習得を伴うきちんとした学問修業をしなかった人に違いない。大学生のキャリアデザインについて、学問修業によるキャリア形成を抜きにして語ることは、空疎なおしゃべりにすぎないだろう。

3．「キャリアデザイン研究」における「人物研究」の方法～福沢諭吉にそくして～

1）「人物研究」の焦点

①　時代と土地と家族の文化の中で、修得した生活や表現の技術や技と個人、地域、時代の課題の接点～幼少期から少年期～

人物研究の焦点の一つは、その人が生まれた時代、土地、家族の社会階層と家族の中での位置、その時代や土地、家族がもっていた広い意味での生活や表現の技術や智慧を分析することである。また、それがどこからどのように具体的に伝わってきたのかをふまえながら、本人がどのような内容をどのように修得したのか、それをどのように活用していたのかの分析も、重要である。そして、その人物の願いや不満がどのようなものであったのかについて、時代や地域、階層の課題と重ね合わせてとらえることが必要である。

福沢の場合、本紀要の第２号、３号、５号に詳述してあるのでここでは簡略にするが、大阪生まれで中津に帰ったために、時代の共通教養としての漢籍修業に加えて、前野良沢、三浦梅園や帆足萬理などの豊前・豊後の漢学者・蘭学者・医者・藩政改革・日本開国家たちの学統に触れた。また、「十二石二人扶持」という貧しい母子家庭はあった。しかし、母と兄を中心に助けあい愛し合う暖かさを経験し、これが福沢が終生、人を信じる生活ができ、家族関係、交友関係、事業にも成功できる基礎の一つとなった。また、内職生活から庶民の生活技術やたくましさ、母から優しさと男尊女卑のくだらなさをも学んだ。そして、下級武士だった父の境遇から身分制の問題点を感じるとともに、次男だったので家督を継ぐ立場にはなく、学問などで身を立てることを迫られている境遇にあった。このことと、大阪の文化を身につけているために、「二つの文化」の摩擦に苦しみながらも広い視野をもたざるを得なかったこと、さらに

Hosei University Repository

は、奥平藩が譜代であったために幕末に討幕運動には参加し得なかったことなどが、福沢に長崎以後の飛躍と国家権力から距離を置く「市井の改革者」を貫かせる要因となった。

②　一定の条件が整いチャンスをうまくいかして人生の中で一定の到達点を迎える～青年期から成人前期～

人は青年期固有の人生選択に苦しみながら、必要な努力・修行をすることによって、何程かの到達点に達し、独立を実現することができる。

福沢の場合、長崎、大阪での必死の蘭学修業と江戸に出て蘭学塾教師をしながら英学修業を行った結果、最初は「従僕」として行った訪米、訪欧経験をもとに書いた『西洋事情』がベストセラーとなり、諭吉は人生の一つのピークを迎える。それを一貫して支えてくれたのが、兄三之助、中津の同学で江戸家老だった奥平壱岐、尊敬する師匠の緒方洪庵と、妻であった。

③　挫折とそこからの立ち上がりと困難を越える力を身につける時期～成人期～

人は誰でも挫折を経験する。人によっては青年期に挫折する人もあり、成人期になってからの人もいる。最初の挫折は人生の厳しい試練であり、生きる気力を失う程の場合も珍しくない。ときには失恋であり、ときには学業であり、またときには仕事上の問題であったりもする。そして、周囲や自分の技や智慧に助けられながら、それを乗り越え、その後の人生に立ち向かい、困難を糧に自身のキャリアを歩んでいく。

福沢の場合、第二回の訪米からの帰りにトラブルに巻き込まれ、幕府から謹慎処分を受けるという最初の「挫折」を経験する。そして、それを機会に、一身上の問題として自由や「人としての通義」「権理通義」「権義」＝right に目覚め、「小民の教育に専一」しつつ、市井の塾経営者、出版・著述業によって、日本社会を変える「改革者」になることを、決意する。その後、『学問のすすめ』『文明論之概略』等の出版や「慶應義塾」の本格的展開等を進め、朝鮮近代化にも熱心に協力してきた。しかし、明治14年の政変以後の伊藤博文との確執、大日本帝国・教育勅語発布による「改革の挫折」、金玉均や朝鮮人留学生たちによる朝鮮近代化の挫折、金の暗殺・漢城（＝ソウル）でのさらし首という度重なる「挫折」にも直面した。しかし、国内的には大隈重信らと協力しつ

Hosei University Repository

つ、『日本男子論』『女大学批評』『新女大学』などによる伊藤批判を続け、対外的には、大清国からの朝鮮の独立の断行を政府に働きかけるなどの対応をした。

④　次世代への遺産と遺言～晩年～

人はその活動のピークを過ぎて、自分の生きた人生を受け継いでほしいと願い、次世代にメッセージを託す。言語的なメッセージはなくとも、生活空間や習慣の中にメッセージが託される場合もある。

福沢の場合、最晩年に、教育勅語や大日本帝国憲法を正面から批判する内容の「修身要領」を慶應義塾の「方針」として作る指揮をした。その内容は戦後の憲法や教育基本法に引き継がれ、多くの著作は今日も、各国語に訳されて読み継がれている。そしてその肖像は、壱万円の日本銀行券に印刷されている。

2）「人物研究」の方法

①　研究対象の選定

研究する人物を選ぶ要件は、次の 4 点にある。

ⅰ）対象人物に“惚れている”こと、対象人物を“面白い”と思っていること

人物研究を一定の期間行い論文にまとめるには、様々な面白さとともに、苦労が伴う。思うように資料が集まらない。聞き取りのアポイントメントが取れない。時間や資金面の制約からフィールドワークが思うように実施できない。集めたデータの整理の時間がとれない。データ解釈で行き詰まる。従来の説と自分の解釈が衝突して混乱する。面白い視点が出せない。論文執筆で行き詰まる等々である。こうした困難な局面を打開するエネルギーの源泉の 1 つは、研究対象である人物に惚れている、あるいはその人物を面白いと思っていることである。

福沢諭吉の場合であれば、

・「幕府から謹慎処分をくらった“挫折”から“小民の教育に専一”するとして著述・塾経営業者として立ち上がっていくプロセスが興味深い」
・「“進歩の旗手”という福沢評価と“アジア侵略の先兵”という福沢評価の矛盾に関心がある」

Hosei University Repository

・「朱子学的な教養を身につけていたこととオランダ学や英米学を吸収して日本についての処方箋を書くプロセスはなぜ成立し得たのか」
・「伊藤博文との蜜月時代から決裂し一生涯ライバルであったことを福沢と伊藤の両サイドから見てみたい」
・「それが『学問のすすめ』および保守的な『教育勅語』と教育基本法につながる『修身要領』として表現されていることを歴史の中で考えてみたい」
・「人間のキャリアと市民社会や産業社会のキャリアとを一体のものとして考えていたことと、福沢の学んだ朱子学や市民社会論・モラルサイエンスとの関係を知りたい」

等々、さまざまな“惚れ方”“面白がり方”がある。

そうしたことは、自分の両親や祖父母、好きな作家、尊敬する人物、小さい頃からのあこがれの人など、どんな人を対象とする場合でも、“この人のここが面白い”“この人のこういう秘密を知りたい”など、さまざまに見いだしうる。こうした点について、情報を集め、読み、調べ、いろいろと考えをめぐらし、自己対話、友人や先輩、指導者との意見交換を行うことが大切である。

これは、“研究を行う内的必然性”を明確にする、ということである。

ⅱ）研究の学説史上の意味を考えること～研究の社会的意味①

第二の要件は、研究の学説史上の意味を考えることである。この研究をすると、この人物のこれまでの研究に、このような“一粒の真実”を付け加えることができる、という点である。

たとえば福沢について、「朱子学的な教養を身につけていたこととオランダ学や英米学を吸収して日本についての処方箋を書くプロセスはなぜ成立し得たのか」というテーマを立てたとする。

この点について、福沢の専門的研究者と見なされてきた羽仁五郎、丸山真男、山住正己、伊藤正雄、安川寿之助らは、福沢が長崎や大阪で行った蘭学修業や江戸に出て以後の二度の訪米と一度の訪欧以後の英米学の吸収にのみ着目し、福沢が中津において行った漢学修行やその背景には注目しなかった。そのために、三浦梅園、帆足萬里などの豊後・豊前の“漢学者であり蘭学者”である先輩たちとの連続性を見落とした。梅園や萬里たちが、18～19世紀半ばに

Hosei University Repository

『東潜夫論』で幕末の国際関係や国防論を、『窮理通』で宇宙から人体までの自然科学的認識を叙述し、『玄語』で論理学や宇宙論を、『価原』で商品の価格と経済循環との関係を論じていたこと。それと、長崎以後の福沢の認識枠組みや発想との異同を検討できなかった。その結果、福沢が「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」「一身独立して一国独立す」と言ったことが、中国古典の“本歌取り”であることを見落とした。“天が人に与えたものを性という、性に従うことを道という、道を修めることを教えという”“修身斉家治国平天下”という『中庸』『大学』という、当時の人なら誰でも分かる“本歌”を見落とした。そのために『学問のすすめ』がなぜベストセラーになったのか、それが江戸時代の武士や上層の農工商の民の共通教養の発展であることに注意を促せなかった。それが、明治の教養や学問、科学が江戸時代のそれらとは断絶したという面を過度に強調することにつながり、それは今日に至るまで日本や東アジアの教養や学問、科学の発展にとって１つの足枷となっている。

また、中津在住の郷土史家たちは、1980年代以後、連続性に着目した著作を発表し続けている。しかし、蘭学、蘭方医学の内容には着目したものの、中津時代の漢学の内容に立ち入っていないために、福沢に焦点を当てた場合には、連続性と不連続性との関係を解くには至っていないように見える。

こうした状況をふまえたとき、この課題を検討し具体的状況を明らかにすることによって、福沢に限らず江戸時代の日本や東アジアの学問・科学・教養と明治以後のそれとの異同、連続性と不連続性とを明らかにできる(12)。

iii）研究の実践的な意味を考えること～研究の社会的意味②

このように、具体的な時代と人物にそくしてあることがらを具体的に明らかにすることは、研究史や学説史において「“一粒の真実”を付け加える」だけでなく、現代社会における人々のキャリアデザインにとって、実践的な指針を与えることにもなる。

それは、より一般的な学問・科学・芸術・教養、智慧や技術について、発展の図式を描くことができるという点である。そしてその図式とは、①その土地の伝統的な学問・科学・芸術・教養、智慧や技術をしっかり吸収し、②外からの刺激を適切に受け入れ、③その両方をふまえて独自の努力をすることによって、初めて、新たな発展の道を歩むことが可能になるという、三つの点から成

Hosei University Repository

り立つ。

この図式は、一人一人のキャリアで残を考える場合にも、有効性を発揮する。

「キャリアとは自分らしく生きること」「なりたい自分になろう」という、耳触りのよい言葉や宣伝をいわゆる“キャリアビジネス”が行っている。そのなかで、自分が生まれ育った土地で必要な経験を積み、先人たちが培ってきた技や智慧、学問や科学、芸術や教養、リテラシーをしっかり身につけずに、「自分らしく生きる」「なりたい自分になれる」と考えるのは、思い込みでしかない。が、高校や予備校、大学や社会人の転職セミナーなどで振りまかれていることも少なくない。その結果、技や智慧、様々な能力やリテラシーを身につける努力が半ば放棄されて、中途半端な外国語会話や“資格”取得、エントリーシートの書き方や就職面接の受け方のセミナーなどに、必要以上の時間を費やしている現実も、ある。そして能力がついていないので、就職も家族生活や地域生活も友達関係、コミュニティーや地方自治体、国家や国連、地球とのつき合いがうまくできない。そういう、不幸な現実もあちこちで見られる。

もちろん外国語会話や資格取得、エントリーシートや面接の訓練は必要である。しかし、①自分が育った土地の技や智慧等々をしっかり吸収し、生活習慣の中でそれを血肉化し、②同時に都会や地方、外国や宇宙など外からの刺激もしっかり受け止めそこでの技や智慧を学び、③自分や自分たちの現実的課題に見合った暮らし方、働き方、遊び方、つき合い方のシステムや製品を作り出し技や智慧を磨いていく。その中で自分の能力を発揮し磨いていくことが、キャリアデザインの基本である。そして、先の図式によって、この点が鮮明になる。この基本的プロセスの中に位置づけられるときに、外国語会話や資格取得、エントリーシート面接訓練等々は、キャリアデザインにとって大いに有効になる。

先の角度からの福沢の“人物研究”から得られる１つの“定式”によって、このような「キャリアビジネス」の無責任な側面や、それが様々な現場に与える悪影響に対して、“そんなことをしていたら、人の能力形成や職業選択、人生設計を狂わせ、社会も衰退に向かう”という、実践的な警告を発することができる。そして、歴史や現実、自分や自分に関わる人々や自然、産業、文化に

Hosei University Repository

ついて、自分や他の人々組織や世界、自然に対する積極的な働きかけの経験を含めて、しっかりしたリテラシーの修得や能力形成のためのプログラム作成とその実施が大事であること。それに依拠して、一人ひとりの能力を育てることに「キャリア教育」が集中すべきであると、促すことができる。これは、１つの“人物研究”の成果がおこなうことのできる実践的な側面である。

こうしたことは、福沢諭吉という人の人物研究だけによるのではない。その人物の選定理由とテーマ設定を適切に行うならば、どのような人物を研究しても、可能なことである。たとえば、大分県の労働運動や社会保障充実運動のリーダーである自分の祖父 MS 氏の研究をしている学生の場合、その研究を進めることによって、大分県のこの分野のことが一人の人物を通じていっそう具体的に明らかにできる。それによって、研究史上の「“一粒の真実”を付け加える」ことが可能となる。それは同時に、①第２次世界大戦後の労働運動や社会保障運動が、戦後の大分県という地域の課題解決についての人々の願いと、②“満州帰り”の若者のエネルギーと、③戦争中の弾圧をくぐって僅かに残った戦前労働運動経験者や学者たちの技や智慧という、３つの要素が結びつきながら、④大分の特色を生かして、成立・展開したことを示す。そしてこのことは、今日の「非正規雇用三分の一」という社会状況の中で、①課題解決を求める人々の願いや、非正規雇用で苦しみ“青年ユニオン”等に参加しはじめた若者たち、②労働運動を地道に行ってきた経験者、路上生活者などの支援をしてきた社会運動家、学者たちなどの結びつきと、③ローカルな要素を生かすことが、④よりよい“友愛”に充ちた社会へと“Change！”し“Yes, we can！”という確信を、人々がもつキャリア形成の道を、実践的に指し示すことになる。

これは、12才で三重県から東京に来て大関になり相撲部屋を開いた父を研究する場合にも、言える。清朝末期の「変法自強」運動に取り組み挫折し亡命しながら、女性たちに支えられて意志を貫いた康有為。11才で孤児院に預けられてお針子修業をし、なりたかった歌手にはなれずにツテをたどって女性を束縛する衣装から活動的な衣装へとファッションを変えたココ・シャネル。彼ら／彼女らの場合にも、同様のことが言える。

iv）資料があること

“人物のキャリアデザイン”研究が成り立つ第四の条件は、研究を行うだけ

Hosei University Repository

の資料があることである。

どんなに面白い着想でも、研究史上の意味や実践的な意味があることだとしても、実際に研究を進めるためには、材料、“資料”が欠かせない。それなしには、思いだけが空回りして、何事も進まず、そのうちに疲れて、研究意欲そのものが萎えてしまう。その意味では、研究の初学者は、研究の先輩たちの意見やアドバイスを多く聞き、その上で取捨選択しながら研究を行う必要がある。だから、学問修業に限定するという大前提のもとで、ときには“師匠”や“親方”に“弟子入り”する覚悟が必要なときもある。

②　「人物研究」の具体的手順～資料収集・整理から論文執筆へ～

上記の手順に従って研究対象とする人物を決めた後、本格的な作業手順の一方法について、以下に述べる。

ｉ）先行研究を探す

研究の一番の近道は、先行研究をしっかりと検討することである。先行研究には一般的なものとあるテーマのもとに厳密な実証・論証を行う学術的なものとがある。いずれの場合でも、これらの資料を探すためには、図書館や大学研究所などの学術機関の蔵書検索が欠かせない手続きである。インターネットが発達している今日、初学者は Google や Yahoo などの一般的インターネット検索システム、Amazon などの書籍通信販売システムの検索をし、それで済ませる傾向も見られる。これらのインターネット検索システムも一定の情報、とくに新刊書の情報を得るためには役立つ。しかし、学術研究として“人物研究”を行う上では、きわめて不十分である。そこでまず、自分の所属する大学図書館や資料室で検索した後、最低限でも国立国会図書館の蔵書の検索を行うことが不可欠である。そしてその後に、必要に応じて関連の大学や研究機関、地方図書館、個人の蔵書等に進んでいくべきである。

ａ）書籍の検索

日本で出版された書籍や雑誌は、ある時期以来、国立国会図書館への納本が義務づけられているので、同図書館の蔵書検索が、一番の近道の１つである。同図書館のホームページの「NDL–OPAC」画面において、「一般資料の検索」等から、著者名、書名、記事のキーワードなどを入れて検索することができる。現物は同図書館で閲覧可能なものが多く、ものによっては大学図書館との

Hosei University Repository

連携で閲覧することも可能である。

b）論文、雑誌記事の検索

国会図書館では、「雑誌記事索引の検索」に著者名、記事のキーワードなどを入れて、学術雑誌の論文を含む雑誌記事を検索することができる。これは、一定の制約の下に同図書館において複写を依頼することも可能である。

c）「参考文献」や「注」の書籍、論文を調べる

先行研究を知る１つの有力な手がかりは、関連図書や論文の「参考文献」欄や「注」「註」の欄に出ている文献を探すことである。これらの文献は、研究しようとしている人物やテーマと密接に関わるものが多いので、「参考文献」欄や「注」「註」の欄は“関連文献目録の宝庫”である。

ⅱ）資料を集め、読む

関連文献のおおよその様相や所在を探りながら、どのような資料をどのように読むべきか、という点について述べる。

a）人物の人生の概略を把握する～自伝、伝記、資料館・記念館、聞き取り～

まず第一は、研究対象とする人物の人生＝キャリアの概略を知るための資料である。

仮に、その人物に関する自伝、伝記、資料館・記念館などがある場合には、それらの書籍に目を通し、資料館等に足を運ぶことからはじめるとよい。ただし、自伝や伝記には当然のことながらバイヤスのかかったものが多いので、そこに書いていることが全て真実であると決めてかかってはならない。

・自伝

福沢について言えば、『福翁自伝』が基本的資料の１つになるが、『福翁自伝』には事実と異なることも少なくない。たとえば、福沢が属した中津藩の家老の一人である奥平壱岐について福沢は“頭が悪い”“ボンクラだ”という趣旨のことを多く書いている。しかし、資料を突き合わせると、福沢が長崎に出るのも、江戸に出るのも、アメリカに出るのも全て奥平壱岐が積極的に関わっている。壱岐が幕末に失脚したためか、“実を言えばおれの方が相当に悪だ”という一種の懺悔をしている箇所がある(13)が、多くの人はこの『自伝』の叙述を鵜呑みにしている。また『自伝』における内職の話や、10歳以前から塾に行っていたにもかかわらず“晩学”を強調している点は、朱子の『大学章句序』

Hosei University Repository

やフランクリンの『フランクリン自伝』における「掃除」「印刷職人修業」の話や「16歳から大学に行く」という叙述に合わせてある可能性が強い。

・伝記

このようにいろいろと検討すべき点がある『自伝』をもとに、石川幹明『福沢諭吉伝』（全 4 巻岩波書店）や小泉信三『福沢諭吉』（岩波新書）が制作されているという問題点はあるが、両書ともに、必読文献ではある。

・資料館・記念館

福沢関連の資料館は、少なくとも 2 カ所ある。1 つは慶應義塾の「福澤研究センター」で、小さな展示室と充実した資料室がある。この展示室は小さいが、最近の研究成果を機敏に反映しているという点では充実している。もう一つは福沢が育った大分県中津市の「福沢諭吉旧居」と「福沢諭吉記念館」で、旧居に関しては、場所は当時と同じだが、建物は親戚の家を移築したものである。しかし、ある程度は同時の雰囲気を伝えている。「記念館」の展示は慶応の「センター」の展示よりも、その点数と生涯にわたるという点では、充実している。

・資料館・協会・学会の刊行物

また、慶応のセンターの発行する「通信」や「福澤研究センター叢書」年報や福沢諭吉協会が発行する『福澤諭吉年鑑』にも福澤研究の論文等が多く掲載されている。

・聞き取り

研究対象人物の自伝や伝記、記念館などがない場合、聞き取りが有効な方法の 1 つとなる。本人が生きている場合には本人からの聞き取りが第 1 に有効である。本人がすでに他界している場合には、家族や親類、関係者からの聞き取りが大きな材料となる。

しかし自伝や伝記の場合と同様に、聞き取りにもいろいろと検討すべき点がある。それは当事者や家族、関係者の記憶が薄れていたり、記憶違いがあったり、事実であっても意識的に話さなかったり、事実と違うことが語られたりすることが珍しくないことである。そこで聞き取りにあたっては、それまでの調査内容を年表に整理したり、他の人から聞いた内容を提示したりしながら実施することが望ましい。記憶を呼び覚ましたり、事実関係や見解の違いを必要な

Hosei University Repository

限りで浮かび上がらせたりすることが、多様なりとも促されるからである。また、幾人かの関係者の座談会を開いてもらい、互いに記憶を呼び覚ましたり、記憶違いを訂正してもらったり、見解の違いについて議論してもらうことも、１つの有効な方法である。

そのようにして必要な当事者や関係者の話を複数聞くことにより、徐々に研究対象のキャリア＝人生や仕事の軌跡が浮かび上がってくる。その際に、複数の人が一致して述べている点は、“ムラ社会”における意図的な隠蔽の場合を除けば、おおむね事実として認定して良いことになる。また、事実認識や見解が異なるところは、キャリア形成にとっての重要なポイントの１つであることも多い。

筆者自身の経験によれば、10人の人からの聞き取りを行うとおおよその輪郭が浮かび上がる。30人の人から聞くと“だいたい間違いはないだろう”というピクチャーが描ける。そして50人の人から聞くと、さらに精度が高まり、基本的に OK となる。

b）作品を知る、作品を“読みぬく”ことと“つまみ食い”～全集、作品集、著作集、日記、手帳、書簡、作文・詩、絵画・彫刻など～

研究対象のキャリアを知るためには、本人の作品を知ることが大事である。ここでいう作品とは、その人が自ら書いたり、描いたり、作ったり、組み立てたり、育てたりした、書物やデザイン、産物、建築物、音楽、組織やその組織の人々、方針など、様々なものがある。棋士であれば棋譜。力士であれば相撲の取り組み。野球選手ならば試合内容。絵本作家ならば絵本。演奏家なら演奏やレコード。農民なら米などの作物。親ならば子どもたちや家族。会社員ならば携わったプロジェクト。会社経営者なら経営内容。技術者ならば製品や特許。上司ならば部下の育成。学者や学校創立者ならば学問的業績や作った学校の歴史や実績。“ご隠居”ならば近所の人とのつき合い、等々である。

また、誰の場合でもありうる墓に、故人の遺志が反映されていることもある。その場合は一種の“作品”とも言える。

福澤の場合、福澤の生涯の著作は基本的に『福澤諭吉全集』（全21巻　岩波書店）に収録されている。それは、書物として刊行された著作、『時事新報』の主筆として執筆または指揮をした社説、雑誌記事等を収録した「文集」、未

Hosei University Repository

発表の草稿、書簡、「修身要領」などの慶應義塾の方針書、手帳のメモなどからなる。その他に、新たに発見された資料が『福澤諭吉書簡集』（全８巻　岩波書店）に補われていたり、慶応の研究センターが出す『慶應義塾福澤研究センター資料』などに逐次収録されたりしている。また、福澤の書などは一部写真になっているが、センターや資料館、個人などで保管されている。

これらの基本資料を“読み抜く”ことが、人物研究にとっては重要な基礎作業であり、福澤全集のばあい、これを読み抜くには数年の年期が必要となる。そこで初学者の場合には、“必要に応じて読む”ことからはじめるのが適切である。しかし、常に文脈を無視した“つまみ食い”になる危険性を自覚することが大事である。また、“つまみ食い”の指摘を喜んで受け入れる寛容さと、真実のために学び問う＝学問に対する真摯さを心がけることも大事である。

麻布にある妻と一緒の墓碑がある墓石の下に、福澤は眠っている。また、母も同じ区画内にあるが、母子家庭で育ち女性を尊重することに努めた。「三従七去」を批判し、“夫に妻を棄てる権利があるならば、妻にも夫を棄てる権利がある”と“新女大学”を著した福澤の遺志が、麻布の墓には表現されていると見られる。

ｃ）本人につながる人々

研究対象本人に関する直接的資料の検討とともに、本人に関わる様々な人々の資料が検討される必要がある。それは、親兄弟姉妹や師匠、同輩、学んだテキストや作品、配偶者や子孫、弟子、後輩などに関わるものである。

・家族・親類

福澤の場合、１歳半でなくなった父百助によって、身分制にとらわれない社会関係を作るという“宿題”を、終生与えられた。“女手一つで”５人の子どもを育てた母お順や３人の姉たちからは、人への優しさを受け継ぎ、対等な男女関係や女性が自立できる社会という宿題を受け取った。父亡き後に家督を継いだ兄三之助は、弟を愛し一人前に育てようと、漢学の手ほどきや帆足萬理門下の野本白巌の塾へと誘い、藩政改革や国防問題、長崎や大阪での蘭学修業に道をつけた。

藩の上役の娘であった福澤の妻は、蘭学者、英学者、学校・出版社・新聞社の経営者として張り切り、伊藤博文との確執で苦境に立ち、再起する福澤と、

Hosei University Repository

子どもたちが一人前に育つ過程、熟成の面倒見などを、終始支えた。福澤の子どもたちは、アメリカ留学などによって世界の文化を吸収するとともに、学校その他の福澤の事業を、様々な形で受け継ぎ発展させた。

・師匠

福澤の師匠は、帆足萬里や三浦梅園、前野良沢ら、豊後豊前の漢学、蘭学、医学、天文学、論理学、藩政改革や国防、農業技術、農業経営などに関わる人々の、「学統」をつぐ人々であった。彼らは、「修身斉家治国平天下」という、一人ひとりが自分自身で修業しながら、家族や家業、産業や交易を支え、人を育て、国家を安定させて人々の幸福を実現して、世界中が平穏であるために、実務を基礎とした学問を行うという、伝統的であり妥当性をもつ学問の目的を、常に自覚していた。また、「下学上達」「格物致知窮理」という、具体的なものとかかわって実務的、実践的、実験的、実証的な学びと問い＝学問が、抽象度の高い学問を産み出す基礎であることを肝に銘じながら、一般法則を探求すべきだという、認識論をもっていた。この基礎の上に、天文学・宇宙論から人体論、解剖学、医学にいたる自然科学や、国防論、国家経営論、軍事技術論、植物・薬学論、農業技術・農家経営論、商品価格論、言語学、論理学、外国語習得法などの、実証的、臨床的な学問と実際の医療行為などを行っていた。中津藩医であった前野良沢をリーダーとする『解体新書』翻訳の顛末を書いた『蘭学事始』を、明治になって福澤が編纂出版したように、これらの人の学問を受け継いで、その上に蘭学、英米学修業をしたところに、福澤の独創性が生まれた。

そこで、『三浦梅園全集』『帆足萬里全集』や吉川弘文館から刊行されている『三浦梅園』『帆足萬里』、岩波文庫の『蘭学事始』、大分県が刊行する『大分県先哲叢書』、大分合同新聞社刊の『大分人物事典』、農文協刊行の大蔵永常関連のものなどが、必要に応じて検討される必要がある。「三浦梅園資料館」や「旧宅」は整備・公開されているが、萬里関係については、資料が「日出町立帆足萬里図書館」に保管されて、特別許可によって閲覧は可能であるが、整理や展示は十分でない。また、萬里が南宋・朱子の「白鹿書院」や朝鮮・李退渓の「陶山書院」を模して作ったと考えられる「西援精舎」跡地の大きな石碑は茂る草地の中にある。

Hosei University Repository

大阪時代の師匠としては緒方洪庵がおり、慶應義塾の直接のモデルが考案の適塾とも言われている。洪庵については研究所や資料も多く、当時の「適塾」の建物のおおよそが大阪大学医学部の施設として保存され、資料館として公開されている。

中国古典関係者を除いて福澤に強い影響を与えた外国人として、フランクリンをあげることができる。福澤は複数の著作で、雷の正体が電気であることを発見したフランクリンの凧の実験に論及しているが、『福翁自伝』と『フランクリン自伝』とが、その幼少期の記述内容、とくに手仕事を好んだことについての叙述には親近性が見られる。また独立戦争時の外交官、独立宣言起草の精神的支柱でもあったフランクリンはまた、実業家、科学者、ペンシルベニア大学創始者、フィラデルフィア図書館創始者でもあった。この仕事の多面性も福澤の仕事の多面性と似ている。

アメリカ人ではまた、リンカーンの死後、後継大統領のジョンソンと会っているが、奴隷解放令を出して凶弾に倒れたリンカーンからも強い影響を受けたと考えられる。さらに新しい時代に合ったモラルを打ち立てようとしていた福澤に影響を与えたのはウェーランドの『モラルサイエンス』であったが、フランス人のトクビルの著書も、強い影響を与えていたと考えられる。したがって、これらの人々に関する資料も視野に入れられる必要がある。

・同輩、協力者

同輩・協力者としての最大の人物の一人は、福澤を長崎、江戸、アメリカ、ヨーロッパへと導いた中津藩江戸家老・奥平壱岐である。幕末に壱岐が失脚したこともあり、壱岐については分からないことが多い。しかし、映画『福澤諭吉』とその基礎認識となった『福澤諭吉』（新潮文庫）は、壱岐に焦点を当てたものであり、小久保明浩『塾の水脈』（武蔵野美術大学出版局）も、この点に焦点を当てようとしているので、必読と言える。中津藩関係の協力者としては、壱岐の他に、中津藩の上士であり慶應義塾経営の片腕であった小幡篤次郎がいる。また、壱岐が宇和島伊達藩から養子として招いた最後の中津藩主で、福澤が『学問のすすめ』を書いた英学塾「中津市学校」設立のパートナーであった奥平昌邁も重要な協力者であった。

中津藩以外では森有礼ら明六社の社員も重要である。そして「明治14年の政

Hosei University Repository

変」までは大隈重信、井上馨とともに、木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通亡き後に進歩派三人組を形成し、福澤と密接な協力をしていたが、その後は終生の“ライバル”となった伊藤博文を欠くことはできない。逆に、伊藤との争いに敗れて下野した大隈重信は、その後も福澤と協力関係にあった。

東アジアに眼を拡げると、福澤と親交が深く、明治維新に刺激を受けた朝鮮開明派のクーデターが清朝の袁世凱軍に敗れた後、日本に亡命してきた金玉均はアジアの近代化をともに進めようとする同志的関係にあり、これら「開化派」の朝鮮人たちも欠かすことはできない。

d）本人につながる場所と時代の理解とフィールドワーク

人物に直接関わる資料に加えて、研究対象となる人物が生まれた場所、育った場所、訪問した場所、本人が活躍した場所、本人が死んだ場所を知ることが、研究対象となる人物を具体的な空間と時間において再現する上で、欠かせない。とくに現地に行って体感するフィールドワークは、自分自身のイメージを作り、研究意欲を刺激し、文字資料、言語資料などを読む上で大きな手助けになる。

・大阪

福澤の場合、生まれたのは大阪堂島の中津藩蔵屋敷であり、本格的な蘭学修業をはじめたときに兄の三之助が勤務していたのも同じ場所であった。現在そこには「福澤諭吉生誕の地」という石碑が建っているが、当時の蔵屋敷の面影は少ない。そこで、商業都市大阪という町の成り立ちについて、関連文献や遺跡等を訪ねることが大事になる。古くは『古事記』において「カムヤマトノイワレヒコ」として登場し、一般的には「神武天皇」とされる人物がかつての中津藩の藩域であった宇佐を出発して「ナガスネヒコ」に撃退されたという時代。難波宮の時代。石山本願寺を中心として商業都市堺とともに繁栄した時代を経て、信長・秀吉による大坂攻めと堺商人への圧力の時代。全焼した本願寺の後に、その場所に建てられた秀吉と家康の大坂城。堺商人を集め、蔵屋敷が置かれた商都大坂。人形浄瑠璃や井原西鶴、近松門左衛門らの活躍、懐徳堂などの商人による学塾の設立。福澤が「塾頭」を務めた蘭方医・緒方洪庵の適塾。適塾や「大阪府立歴史博物館」や難波宮遺跡、大坂城訪問なども含む作業によって、福澤が生まれ、蘭学修業した頃の大阪が少しずつイメージされてく

Hosei University Repository

る。そして、大阪で福澤が経験し、得たものが、感じられ、それが資料を読むときに「行間を読む」力になってくる。

・中津

長崎に出るまでに育った場所は、中津である。中津には資料館や「旧居」、中津城、寺町等があるが、その中津は宇佐神宮の本拠地近くであり、古くから大陸や朝鮮半島、フィリピンのマニラやマカオ、ジャワのバタビア（ジャカルタ）、マラッカ、長崎や平戸、九州における江戸幕府の天領統括の中心地日田などと、大阪、堺をつなぐ交通や商取引の要衝でもあった。またキリシタン大名の大友宗麟の勢力圏でもあり、初代藩主の黒田如水もキリシタン大名であり、豊後豊前の漢学者・蘭学者・近代化準備を意識した学者ネットワークが強い土地でもあった。これらの一部は、中津城や「村上医家資料館」「大江医家資料館」「小幡篤次郎記念郷土資料館」「中津市学校跡・生田門」「中津市立図書館博物館郷土史コーナー」「大分県先哲資料館」「大分市博物館」「豊前風土記の丘資料館」の展示などによって知ることができる。

・長崎

最初の蘭学修業の地、長崎は、秀吉によってポルトガル人・スペイン人が追放されるまで、ヨーロッパに開かれた日本の玄関の一つであった。その後、平戸からオランダ人居住区が移され「出島」が公式には唯一のヨーロッパとの窓口になる。また、明その後には清の商人を指す、主には福建商であった「唐人」の居住地でもあった。そして、公式外交関係があった朝鮮、薩摩と明・清への「両属」関係にあった琉球からの施設、オランダ商館長などの江戸参詣の道中を除けば、当時の日本人と外国人とくにヨーロッパ人とが接触できる唯一の場所であった。今日、唐人町や「長崎くんち」の諏訪神社、出島や長崎代官所の復元と博物館としての公開、シーボルト記念館、大浦天主堂、グラバー邸、香港上海銀行長崎支店、大浦天主堂、近くの上五島の資料館や明人である「和冦」の頭目の墓、遣唐使出発地の石碑などが残っている。これらによって、当時を想像することができる。

・江戸・東京と横浜

奥平壱岐に呼ばれて福澤が出てきた江戸で蘭学塾をはじめた場所は築地の中津藩中屋敷であり、それは前野良沢らが『解体新書』を翻訳した場所であっ

Hosei University Repository

た。また、福澤が江戸家老の壱岐に面会するために通ったのは芝の中津藩上屋敷であり、幕府「蛮諸調所」の翻訳方勤務の陪臣となったのは、九段下であった。これらの場所には多く石碑が残っているだけであるが、「慶應義塾」となって最終的に福澤の塾が移転したのは、三田であった。そして、今日の三田には、重要文化財である「演説館」が残っている。この三田の地で福澤は塾生たちと生活を共にし、塾経営、出版社・新聞社経営を行い、自ら講義や「演説」も行った。また銀座に社交のための「交詢社」を設け、サロン作りを行った。

福澤が初めて英語に接してオランダ語が通じないと悟って英語の修業をはじめるきっかけとなったのが横浜であった。横浜は日米条約の後に開港して、漁村から急速に貿易都市となった町だが、福澤の二度の訪米、一度の訪欧も、ここから出発した。この横浜については開港資料館をはじめとする博物館が、当時の様子を教えてくれる。

・アメリカとヨーロッパ

福澤は幕末に二度の訪米と一度の訪欧をしている。一度目の訪米では、軍艦奉行・木村摂津守の「従僕」として咸臨丸で横浜からサンフランシスコに行き、大歓迎を受け、「女尊男卑」に驚き、写真館の娘と言われる女性と一緒に写真を撮っている。二度目の訪米は幕府がアメリカに発注した軍艦の引き取りに、また、幕府や仙台藩などから書籍購入を依頼されている。正式メンバーとして、横浜、サンフランシスコ、パナマまでを船で行き、鉄道でパナマ地峡を渡って、再び船に乗り、ニューヨークで上陸している。その後おそらく鉄道で、独立宣言の地でありフランクリンが活躍したフィラデルフィアを経由してワシントン DC に行き、リンカーン暗殺 2 年後に、後継大統領のジョンソンや海軍提督に会っている。

西海岸と異なり、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン DC は建国時代からの政治都市でもあった。ヨーロッパ的雰囲気の強い東海岸の諸都市訪問により、商業的繁栄とともにヨーロッパとつながり闘いながら、独立や自由、“奴隷解放のための戦争”を実践している USA から、福沢は強いインパクトを受けたと考えられる。今日フィラデルフィアには独立宣言が署名されたた植民地時代の州議事堂が「独立記念館」として公開されている。ビジターセンターでは独立宣言やアメリカ憲法、リンカーンの就任演説やゲッチ

Hosei University Repository

スバーグ演説などが、ハードカバーの冊子になって販売されている。福沢の訪問当時は建設中だったフランス人設計による、“アメリカの中のパリ”とも言える景観のワシントン DC の町。そこには、今日、パルテノン風の“リンカーン神殿”とサンピエトロ風の議事堂を「Constitution Avenue 憲法大通り」が結んでいる。それと直角に交わって十字架を形作る直線の一方の端にオベリスク風のワシントンモニュメント、他方の端にホワイトハウスが建ち、議事堂から見るとその裏側、ワシントンの鉄道の玄関口であるユニオン駅の前に、コロンブスの記念碑が立っている。その様子は。“野蛮なスペイン時代を乗り越えて、エジプト、ギリシャ、ローマを受け継いで、憲法を重視する USA の民主主義がある”と言っているようにも見える。

福沢はこの第二回訪米の帰りの船中でトラブルに巻き込まれ、帰国後幕府からの謹慎処分を受けている。このとき、福沢は「小民の教育に専一」することを決意しつつ、“外国に長くいると自由な発想になるが今の日本はそうなっていないのでお互いに気をつけましょう”と友人に書き送っている。ここにも、自由のために闘おうという、アメリカから福沢が受けたインパクトが顕れている。

福沢の訪欧は、横浜から出発して香港、マラッカ、インドを経由してスエズで上陸。地中海に出て船に乗りマルセイユで上陸。その後、パリ、ベルリン、モスクワ、ストックホルム、アムステルダム、ロンドンなどを訪れている。この旅で福沢は成熟しつつある西欧の民主主義や産業とともに、共和制のフランス、リベラルな立憲君主制のイギリス、オランダ、スウェーデン、開明的絶対君主制のプロイセン、ロシア等の政治体制の違いも観察した。蘭学に親しみオランダ語が堪能であったことと、第一回訪米後だったことからオランダや同じゲルマン語圏のスウェーデン、英語圏のイギリスのリベラルな立憲君主制に親近感をもったと思われる。とくにオランダについては、「第二の故郷に帰ったような心境だった」と『自伝』で述べている。今日のアムステルダムの海洋博物館には、「蘭学」の部屋があり福沢の写真や『自伝』の叙述などが紹介されている。

・香港、インド、トルコ

同時に、イギリス領となったアヘン戦争後の香港、イギリス帝国の支配下に

Hosei University Repository

編入されたかつてのムガール帝国のインド、イギリスやフランスロシアによって独立が危うくなっているかつての大帝国のオスマントルコ領土などの状況を見て衝撃を受けている。とくに威張る白人と卑屈になる香港の広東人や、インド人アラブ人等の対比を見て、一方では“自分たち日本人はこのようになりたくない”と思いつつ、“自分たちもいつかはそうなりたいと思った”とも記している。名誉白人的な複雑な心境ではある。

今日、香港歴史博物館やアヘン戦争の現場になった「虎門」にある二つのアヘン戦争博物館にはアヘン戦争やイギリス時代の香港の変遷の展示があり、香港の中環の一角や上海・外灘には当時の建物が現存している。またイスタンブールのトプカピ宮殿や新宮殿の歴史博物館には、オスマンの勃興から独立の危機、20世紀になってからのケマル・アタチュルクをリーダーとする独立維持と近代化の歴史なども展示されている。

・ソウル・釜山と上海・北京

明治の早い時期、開明派官僚のリーダーである朴泳孝を団長とする使節団との接触以来、福沢は朝鮮近代化の動きに協力してきた。朝鮮で新聞紙を発行したいという相談があったときに弟子の井上角五郎らをソウルに送り築地でハングル活字を作って、漢字ハングル混じりの朝鮮語による旬刊紙『漢城旬報』の刊行を支援。また朝鮮王子を含む朝鮮からの留学生を慶應義塾に迎えた。近代化を目指すクーデター失敗の後に日本に亡命してきた金玉均について、日本政府の金引き渡し要求にもかかわらず、日本での生活の支援を続けた。朝鮮王妃の閔妃と連携した清朝の李鴻章が金を上海に呼び出した。福沢は行けば殺されるから行くなと、止めた。しかし金は、殺されてもいいから行く、と言って、上海で殺された。その後遺体は塩漬けにされて「漢城」＝ソウルに運ばれ、ソウルで首が曝された。

この事件が福沢に衝撃を与えて、これ以後福沢は朝鮮近代化のためには清と朝鮮との宗属関係、柵封体制を断ち切る以外ないと考え、日清開戦論に踏み切る。

今日のソウルにはかつて清朝からの施設を歓迎した門の場所に清朝からの独立を記念して作られた「独立門」があり、日本時代の朝鮮総督府を廃棄して朝鮮の景福宮の復元が進み、日清戦争後に朝鮮に急接近したロシア風の大院君の

Hosei University Repository

旧居などが残っている。また、江戸時代以来の日本との往来の主な窓口であった釜山には、「東萊東軒」など、役所の建物などが残っている。

金玉金殺害の舞台となった上海は香港に続いてイギリスが拠点を構えた大陸の地である。イギリス租界、フランス租界、日本やアメリカなどの共同租界などができ、第2次世界大戦前には東アジア最大の国際都市になる。また北京には、大清皇帝の居城である紫禁城が「故宮」として公開され、1860年のイギリス・フランス連合軍による北京占領時に破壊されたフランス風庭園の円明園は今日も破壊当時の状況を維持して公開されている。

福沢は、トルコ、インド、清朝などアジアの巨大帝国が産業革命後の西欧諸国に敗れ行く様を見て複雑な心境になっていた。それとともに、“西欧諸国は口では民主主義、平等と言いながらダブルスタンダードで、言うことを聞かない国に対しては、最後は砲艦で決着をつける”、“文明の世の中になったといってもまだ文明の入り口にさしかかったに過ぎない”といって、西欧の文明が絶対的なものではなく、身勝手なものであると批判していた。この冷静な目は、清朝などの巨大帝国の状況を見ることによって、いっそう鍛えられたと考えられる。

ｅ）本人の遺産

一人の人物は、生物体として、個体としての命を終えることは避けられない。しかし、その死後に、金銭的なものだけでなく、様々な財産が残される。その一つは直接的な子孫や弟子たちである。また、仕事や作品も遺産として遺される。

福沢の場合、直接的な子孫も様々な形で活躍しているが、慶應義塾その他における弟子たちは、実業界、学界、教育界、政界、官界、スポーツ界、芸術界など多方面で活躍しており、これは日本だけに限られない。さらに、慶應義塾という学校やその出版部、福沢が日本やアジア世界に与えた学問やモラルのあり方は社会に大きな影響を与え、ある程度浸透している。

この遺産という点では、慶應義塾の年誌や『慶應義塾事典』、慶應義塾の卒業生名簿、慶應義塾関連の展覧会などが主な資料となる。また、外国語に翻訳された福沢の著作や伝記、研究所や論文、外国語で書かれた福沢研究の著作なども、遺産の重要な一部として検討されることになる。

Hosei University Repository

iii）文献等資料目録を作る

調査された文献等は、必要なときに内容や発行年等がわかるように、目録として整理される必要がある。

整理の仕方は、それぞれの人にあったやり方でよいが、一つの方法として、一枚一枚カード化しておく方法がある。そこには、ａ）資料名、ｂ）著者、制作者名、ｃ）作成日、発行年月日、ｄ）発行者あるいは制作者、ｅ）目次や主な内容、ｆ）資料の内容や特徴、問題点、ｇ）所蔵場所などが書かれるとよい。

最近ではコンピューターが発達してきたので、コンピューターの表計算ソフトを使って、一覧表で整理することも至って簡単になっている。

iv）ノートを取る

重要な資料については、資料の複製などに、付箋をつけたり、下線を引いたり、マークを入れたり、書き込みをしながら、同時に重要な部分を抜き書きするとよい。この作業量を極力減らし、的確な抜き書きをするためには、事前に資料をよく読むことが大切である。その上で、重要部分を抜き書きすることによって、重要カ所が自ずと記憶されやすくなる。

ｖ）年表を作る

抜き書き等を作成しながら、直接間接に研究対象となる人物に関係することがらを年表にしておくとよい。年表では、縦軸（行）に年月日を、横軸（列）に、少なくとも、ａ）研究対象本人に関する事項、ｂ）家族、師匠、友人、協力者等々、本人の関係者、関係機関に関する事項、ｃ）本人の生まれ育ち活躍した地域や国での関連事項、ｄ）本人が属する国際的な地域や世界での関連事項が設定される必要がある。

いつの年代から始める、いつで終わるのかについては、本人を中心に、必要関連事項までをさかのぼり、本人の影響が今日まで続いているとすれば、今日まで年表は続くものとすることが妥当であろう。

福沢についていえば、ａ）福澤諭吉に関する事項、ｂ）福沢の家族、師匠、友人、協力者や慶應義塾等に関連する事項、ｃ）大阪、中津、長崎、江戸・横浜や日本における関連事項、ｄ）福沢と関係するアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、スウェーデン、清・中華民国、朝鮮・韓国、東アジアや世界における関連事項が、横軸（列）になる。

Hosei University Repository

そして、縦軸（行）の時間的始まりは、『論語』や朱子の『大学章句序』や宇佐や難波に関する『古事記』の叙述なども視野に入れ、壱万円の日本銀行券のポートレイトも含めて福沢の影響は今日も続いているので、終わりは今日までとなる。

同様に相撲力士や親方について研究している場合は相撲や韓国のシルム、モンゴル相撲、中央アジアのレスリングなど、格闘技の始まりから。労働運動についてであれば、世界、日本とその地域の労働運動の始まりから。絵本作家であれば世界や日本の絵本の始まりから、となろう。

この年表にはどんなに些細なことでも記入し、出典を明示しておくと、年表作成をしながら必要事項が整理されて記憶される。それは、自分のインタビューをしたり、論文執筆をしたりするときに、効果を発揮する。

vi）**執筆する**

a）伝えたいことを明確にする

執筆をするに際しては、調査・検討を通じて「これが分かった」「これだけは確かに言える」「これをぜひみんなに伝えたい」「このことについてみんなと意見交換したい」など、“伝えずにはいられないこと”を明確にする必要がある。これがあるていど明確になっていないと、書いていて何が言いたいのかが分からなくなり、執筆意欲が減退することがあるので、自分自身や人に話しかけたりして、中心となることがらと関連することがらを鮮明にする必要がある。

b）ストーリーを作る、イメージする

中心となることがらがある程度はっきりしたら、ストーリーを組み立てる必要がある。それには多様な方法があるが、付箋＝“ポストイット”を使って思いつくままに言いたいことをメモし、壁や模造紙に貼りだして、それを移動させることによって、グループを作るのも一つの方法である。それをふまえながら、その象徴的シーンを幾枚かスケッチして、それらを並べる方法もある。また、目をつぶって、映画のファーストシーントラストシーン、絵本の表表紙と裏表紙をまず決め、次いで、およそ9枚程度、3枚ひと組程度3組の静止画で、中身の展開を鮮明にイメージする方法もある。この3枚ひと組をそれぞれ、物事の「成立」「展開」「発展と終焉・次へのつながり」という風に時系列

Hosei University Repository

的に展開する方法は、最もわかりやすく、組み立てが易しい方法である。もちろん、「成立」「展開」「発展」のどこかを二つに分けて、3枚ひと組で4組、合計12枚で構成する方法もある。これは「起」「承」「転」「結」の方法である。

いずれにしても、論文執筆だからと言って、抽象的な言語や文字だけに依存せず、具体的なイメージをふくらまし、鮮明にすることが大事である。これによってストーリーが明確になり、そのイメージを言語化、文字化することによって論文執筆がスムーズになる。イメージを鮮明にせずにいきなり文章を書き始めると、何を書きたいのか分からなくなり、途中で行き詰まる危険が大きい。

c）全体を構成する～章節立てを行う～

イメージが鮮明になったら、章節立てを行う。先ほど映画のファーストシーントラストシーン、絵本の表表紙と裏表紙と言ったが、これは論文の「序論」＝「はじめに」と「結論」＝「終わりに」にあたる。「はじめに」では、その論文の課題と内容および結論の要点を述べ、「終わりに」では、その論文を通じて明らかになり、「課題」に対して出した回答、今後に残された課題を完結に述べることは、一つの方法である。

また、「9枚程度の静止画で、中身の展開を鮮明にイメージする」と述べたが、これは「本論」部分にあたる。3枚一組で、「成立」＝第1章の第1～3節、「展開」第2章の第1～3節、「発展と終焉・次へのつながり」＝第3章の第1～3節を組み立てる。「3枚ひと組で4組、合計12枚で構成する方法」、「起」「承」「転」「結」の方法をとるならば、「起」＝第1章第1～3節、「承」＝第2章第1～3節、「転」＝第3章第1～3節、「結」＝第4章第1～4節という構成になる。

福沢の一生を扱う場合には、誕生から中津時代までを第1章、長崎から大阪、江戸、訪米・訪欧、『西洋事情』刊行までを第2章とした。謹慎処分の第一の挫折から慶應義塾発足、『学問のすすめ』『文明論の概略』、明治14年の政変から大日本帝国憲法成立の第二の挫折までを第3章。大日本帝国憲法と教育勅語に対抗しつつ『日本婦人論』『日本男子論』などを書き、「修身要領」をとりまとめるまでを第4章、構成への福沢の影響を第5章とする方法もある。そして、第1章と第2章を統合する4章立て、さらに第3章と第4章を統合する

Hosei University Repository

3 章立てもあり得る。

d）執筆する～二度書き直す～

・第 1 稿を最後まで書ききる

章節立てのおよそが決まったら執筆作業に入る。最初は、資料ノートと年表を頼りに、一ヶ月くらいで最後まで書ききることが肝要である。脚本家の橋本忍は、「日本の学校では批判精神を育てるに旺盛だが、創造精神の育成はそれほどでもない。自分の高い批判精神で低い創造精神を批判するとシナリオ執筆の筆がすぐ止まるので、最初は批判精神を発動せずに最後まで書ききることが大事。一度最後まで書ききったら、今度は批判精神を発動して、一度書いたシナリオにどんどん手を入れる。これがよいシナリオを書く私の秘訣です。」とNHK のインタビューで述べている。

・自分で赤ペンを入れて、第 2 稿を書き、理論的再検討を行い、最終稿を書く。

その次に、自分で赤ペンを入れて書き直す。

それが終わったら、師匠や友人など、他の人に第 2 稿を読んでもらい、その間、自分は先行研究との関係や自分が立てた課題との関係での理論的再検討等を行う。そして最終稿を書く。

・注や“てにをは”等をチェックする

その後で、注や参考文献参考文献、助詞、誤字脱字等をチェックし、文体を整える。最近はコンピューターのソフトも文体チェックを行うが、師匠や友人の添削を受けることが効果的な場合もある。筆者の経験では、本多勝一『日本語作文の技術』（朝日文庫）が役に立つ。

4．終わりに

基本的に研究者である大学教員にとって、自分自身の教育実践やそれに関わることがらを文字化することは簡単ではない。それは“研究者”である存在として、他の人々の実践あるいは教育実践を批評することが多く、その批評の眼で自分の授業実践を批評することにある種の恐ろしさを感じるからかも知れない。しかし、文部科学省が“学士力の向上”を言ったかどうかにかかわらず、大学教員も教員であり教育実践の担い手であるということは単純な事実であ

Hosei University Repository

る。それを意識すれば、大学教員が自分自身の教育実践に関わることがらを、必要に応じて適宜、文字化することは、苦しくもあり楽しくもありであるが、いずれにしても必要なことであろう。

日頃、口頭で説明したり学生と討論したりすることを前提としながら、その討論を教員である者、大学という「学問共同体」で教育実践を行っている研究者として、整理して、適切な時期に学生たちに提示する。そしてポジティブな批判を受けながら、教育実践家としても研究者としても、自分自身を鍛えていく姿勢を示す。このことは、「学問共同体」において教員と学生とが真摯に向き合って教員の勉学＝「学問に勉強する」(14)と学生の勉学とをつなぐために不可欠な作業に違いない。そして学生が卒業生となって、職場や地域、家庭、国際社会などの様々な仕事＝「実業」の現場ですすめていく学問＝「実学」(15)の具体的部分と、それを受けながら行われる「実学」の基礎研究部分との継続的な協力の基礎を作ることにもなるからである。

自分自身の授業実践に関わる内容を整理して学生に提示することは、「学問共同体」としての「学部」“faculty”の健全な発展の基礎でもある。とくにキャリアデザイン学部の教員として、自分自身の授業実践における「キャリア」「キャリアデザイン」の定義を仮説的に示すこと。自分自身の授業が「キャリアデザイン研究」のどの位置を占めるものなのかを他の教員との情報・意見交換のなかで、徐々に明らかにしていくこと。これらのことは、faculty の機能の基本的部分と考えられる。

「キャリア」や「キャリアデザイン」の定義、「キャリアデザイン研究」の内容や方法は多様であってよいし、多様であるべきだろう。また、キャリアデザイン学部関係者に限らず、「キャリア」や「キャリアデザイン」に関わる仕事をしていたり、一身上の問題として関心をもったり考えたりしている人たちのすべてが、自由に意見や疑問を出し、議論をする。そして、それぞれなりの見解を豊かにしていく。そういう雰囲気と場所とを多様に作っていくことが、現時点では最も大切なことの一つと考えられる。

この点で、福澤諭吉という人物について、キャリアデザイン研究の基礎論としての「人物研究」という視点からも、研究が進むと、福沢研究がより豊かになるのではないかと考える。

Hosei University Repository

多くの人からの批判をいただければ大変ありがたく思う。

［注］

(1) 私自身の「人物研究」の経験としては、教育学者の古川原、宮原誠一、哲学者の甘粕石助、社会教育法起草者の寺中作雄、長野県と静岡県三島・沼津地域の学習運動のリーダー、八木林二と木部達二、そして福澤諭吉などがある。

(2) 笹川孝一「“学問”修業によるキャリア形成支援～リーマンショック後の大学生のキャリアデザインと大学生協の役割～」日本大学生活協同組合連合会『Univ，Coop』第369号特集「大学生協のキャリア形成支援」2009年12月

(3) リテラシーの定義については、笹川「『識字』についての国際協力の現状と課題」日本社会教育学会編『国際識字10年と日本の課題』1991年　東洋館出版社　参照

(4) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫

(5) ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』岩波文庫

(6) 福澤諭吉『福翁自伝』岩波文庫

(7) 前掲『フランクリン自伝』における「解説」参照、平川知弘『進歩がまだ希望であった頃～フランクリンと福澤諭吉』講談社学術文庫

(8) 笹川「『学問のすすめ』成立過程における中津時代の意義について～「下士」の学問が「上士」の学問を凌駕する～」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第５号　2008年

(9) 福澤諭吉『学問のすすめ』岩波文庫

(10) この点については、筆者も深くかかわっている次の報告書等を参照。『湿地の文化』2009年、『湿地の文化と技術のインベントリー（サンプル版）』2010年、ラムサール条約事務局『文化』ワーキンググループ『湿地と文化～人と地球との関わり～』2010年　いずれも日本国際湿地保全連合刊、笹川他「湿地の文化と技術インベントリー作成の中間報告」日本湿地学会『湿地研究』第１号　2010年

(11) この点については、「朱子学における『実学』の構造」という図を、笹川「福澤諭吉『学問のすすめ』「初編」および「二編端書」のリテラシー論

Hosei University Repository

的解釈」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第3号　2006に、掲げてある。

(12) 前掲、笹川「『学問のすすめ』成立過程における中津時代の意義について」、参照。

(13) 前掲、笹川「『学問のすすめ』成立過程における中津時代の意義について」、参照。

(14) 福沢『学問のすすめ』

(15) 同第1編で「実学」は「人間普通日用に近き実学」＝人間に共通する毎日の生活に近い実学＝と述べているが、それ以下の叙述で、「実学」に、①直接的な日常生活に関わる部分とともに、②基礎理論にあたる部分をも含めている。これは福沢に限らず、「宋学」「朱子学」と言われた12世紀以後の東北アジアの学問の共通理解であった。今日②を排除して①の部分だけを「実学」とする傾向が強いが、歴史的に見れば明瞭な誤解だと言わねばならない。これについては、前掲、笹川「福澤諭吉『学問のすすめ』「初編」および「二編端書」のリテラシー論的解釈」に詳しく述べた。